

市民社会をつくる

報告書



# ボランタリー フォーラム

TOKYO  
2020

今こそ動こう！  
イロドリある未来へ

2020年 [金] [土] [日]

2/7・8・9

飯田橋セントラルプラザ ほか

- 主催** 東京ボランティア・市民活動センター
- 企画運営** 市民社会をつくるボランタリーフォーラムTOKYO2020 実行委員会
- 後援** 東京都、特定非営利活動法人日本 NPO センター
- 特別協賛** 株式会社ガイア、株式会社三菱 UFJ 銀行  
公益財団法人原田積善会、トヨタ自動車株式会社
- 協賛** NEC ネットズエスアイ株式会社、NPO 法人日本ゲートキーパー協会  
NPO 法人モバイル・コミュニケーション・ファンド  
公益財団法人 SOMPO 環境財団(旧 損保ジャパン日本興亜環境財団)  
公益財団法人損保ジャパン日本興亜福祉財団  
公益財団法人日本社会福祉弘済会、公益財団法人日本テレビ小鳩文化事業団  
社会福祉法人テレビ朝日福祉文化事業団  
東京都生活協同組合連合会  
日本労働者協同組合(ワーカーズコープ)連合会
- 協力** 社会福祉法人清水基金  
生活協同組合バルシステム東京  
中央労働金庫  
ベルノ・リカール・ジャパン株式会社  
モンデリーズ・ジャパン株式会社

(五十音順)

お問い合わせ

東京ボランティア・市民活動センター

TEL:03-3235-1171 FAX:03-3235-0050

フォーラムFacebook「市民社会をつくるボランタリーフォーラムtokyo」  
フォーラムTwitter「ボランタリーフォーラム」





## はじめに

東京ボランティア・市民活動センターでは、「ボランティアまつり」「ほらんていあ・めっせ」、2004年からは「ボランタリーフォーラム」と名前を変えながらも、開設当初より、ボランティアや市民活動に関わる方や関心のある方が集い、つながる場をつくってきました。

今年度の「市民社会をつくるボランタリーフォーラム TOKYO2020」（以下、「Vフォーラム」）では、「今こそ動こう！イロドリある未来へ」をテーマに、31の分科会、3つの特別企画を実施し、のべ919名の方にご参加いただきました。

本報告書には、それぞれの分科会の開催目的や様子、分科会を通して伝えたかった実行委員の想いや参加者の声、実施しての成果やこれからの課題を掲載しています。また、職種や年齢も異なる多様な実行委員会メンバーが、議論を重ねながら、Vフォーラムの形を作り上げてきた記録も同時に収められています。

より多くの方に本報告書をご覧頂くことによって、誰もが自分らしく生きることができる豊かな社会を築いていくために、一人ひとりにとってのきっかけや新たな一歩となることを願っています。

東京ボランティア・市民活動センター

# もくじ

## はじめに

### 第1章 企画編

ボランティアフォーラムができるまで・・・・・・・・・・・・・・・・	2
-----------------------------------	---

### 第2章 実施編

市民社会をつくるボランティアフォーラム TOKYO2020 開催概要・・・・・・・・	6
各プログラム実施報告	
01 SDGs ～誰ひとり取り残さない～に向かって踏み出そう・・・・・・・・	8
02 自治会でつながろう！ ～地域活動への参加促進のために～・・・・・・・・	10
03 話しにくさを乗り越える対話の可能性を探ってみよう ～自由に考え、自由に話す哲学カフェ～・・・・・・・・	12
04 「食の安全性」×「地域」×「仕事」 —持続可能な関係づくりとは・・・・・・・・	14
05 オリエンテーション「ボランティアフォーラム TOKYO2020」を300%楽しもう！	16
06 外国にルーツを持つ子どもと共に学ぶ学校とは・・・・・・・・	18
07 私たちは無自覚の差別とどう向き合うのか・・・・・・・・	20
08 あそびうたに触れ合おう♪～広がれ、あそび心！～・・・・・・・・	22
09 「ひきこもり」という言葉がなくなる社会を目指して!! ～わたくしごと化してみよう 「ひきこもり」・8050（はちまるごーまる）問題～	24
10 家族ってなんなんだ!?～映画『沈没家族』から家族のカタチを考える～・・・・・・・・	26
11 災害時の子どもや家庭を支えるために私たちができること・・・・・・・・	28
12 豊かな地域をつくるのは私たち！ ～「地域包括ケアシステム」から制度・セクター・分野を超えて～・・・・・・・・	30
13 ボランティアのトリセツ～「ボランティア活動あるある」編～・・・・・・・・	32
14 映画『ナオトひとりっきり』上映&トークショー ～福島・人と動物、ぼくらはまだここに生きているぞ！～・・・・・・・・	34
15 急増する孤独死は人ごとではない!!～年間3万人その現状とは～・・・・・・・・	36
16 話そうカフェ IRÔDŌRI・・・・・・・・	38
17 イマドキの若者徹底解剖！・・・・・・・・	40
18 元気の種を探してみませんか？・・・・・・・・	42
19 想いをカタチに。助成で広がるボランティア・市民活動の未来・・・・・・・・	44
20 ダブルケア（子育て・介護）に今から備えよう ～個人・組織みんなで支え合う社会をめざして～・・・・・・・・	46
21 政治を語って、暮らしやすい未来を創ろう！・・・・・・・・	48
22 体験から継続した活動へ ～ボランティア証明書で終わらない若者を育てるためのヒント～・・・・・・・・	50
23 発達障害がある大人×「周囲のあなた」=持続可能な就労環境？・・・・・・・・	52
24 盲ろう者も社会で安心して働けるようになるためには？・・・・・・・・	54
25 その「災害への備え」は自分事になっていますか？・・・・・・・・	56
26 私たちが本当に目指す居場所づくりとは ～これからの活動を考えるために組織を見直す～・・・・・・・・	58
27 ボランティアの「始まり」と「今」・・・・・・・・	60
28 クロージング企画～みんなでアクション！～・・・・・・・・	62

29・30 命と食と環境と。雑木林保全活動	
～映画『武蔵野』編～ ～フィールド編～	64
31 多様な世代が関わる「食を通じた居場所づくり」	
～ボランティアの入り口を「見る」×「聞く」×「体験する」～	66
32 Open Café（休憩スペース）	68
33 ふれあい満点市場～NPO・NGOの作品展示販売～	70
34 情報誌『ネットワーク』表紙原画展	72
（参考）市民社会をつくるボランタリーフォーラム開催状況	74
実行委員会名簿	75
協賛・協力団体	76
ボランティアで協力いただいたみなさま	78



# **<第 1 章>**

## **企 画 編**

# ボランティアフォーラムができるまで

## 市民社会をつくるボランティアフォーラム TOKYO とは？

市民社会をつくるボランティアフォーラム TOKYO（以下、「Vフォーラム」）は、私たちの暮らしに関わるさまざまな「社会課題」に焦点をあて、それを共有し、私たち市民にできることを考えていくためのイベントとして2004年から始まり、今年で16回目となりました。

初回から一貫して、分野、地域、セクターを横断したボランティア・市民活動にかかわるメンバーで実行委員会を組織し、ボランティア・市民活動をする中で直面する課題や想いをもとに企画・運営しています。分科会を通して、想いや考えを共有し、参加者や実行委員、それぞれの一步につながることを目的としています。

## 実行委員会について

Vフォーラム実施にあたり、今年度のフォーラムの方向性を検討するために、準備会を3回開催しました。準備会では、これまでのフォーラムを振り返るとともに、今年度の方向性、運営、実行委員のあり方などを話し合いました。

その後、準備会での話し合いをふまえ、さまざまな分野・地域から集まったメンバーからなる実行委員会を立ち上げました。普段は他組織に所属する実行委員同士が連携しながらVフォーラムを作っていく、また、ここで学んだことを自分の組織に持ち帰って活かしていくことも、このVフォーラムだからできることです。



第1回実行委員会の様子。壁には気になっているキーワードを書いた付箋が貼ってあります。

取り組んでみたい社会問題についてのグループワークから始まり、テーマ決め、分科会に関する話し合いを行い、実行委員会は、当日までに9回開催しました。

第1回目の実行委員会では、実行委員がボランティア・市民活動の中で感じる、今気になること・共有したい社会課題を、キーワードとして出しました。挙げられた170以上にわたる多様なキーワードを「今、見えていること(社会課題)」「未来の課題・未来に向けて今すべきこと」「ボランティアな動き」の3つのカテゴリーにまとめました。以降、それぞれのカテゴリーに分かれ、分科会の企画を進めていきました。

分科会企画については、各自が分科会の企画案を持ち寄り、カテゴリーや実行委員会全体で企画内容について何度も話し合いを重ねました。企画者の考えだけでなく、実行委員同士で意見を交えていくことで、よりブラッシュアップされた分科会ができあがっていきます。こうした分科会の企画を進めると同時に、Vフォーラム全体に関わる運営については、部会で話し合いを進めました。

今年度の部会は、Facebookの活用やPR動画を作成する「広報部会」、オープニング・クロージングの企画を行う「全体部会」、アンケートの活用やファンドレイジングに関する検討を行う「マーケ

ティング部会」、話そうカフェIRODORIや、実行委員間の交流会を企画する「交流会部会」の4つの部会を設けました。

終了後のアンケートでは、回答者110名のうち、73名の方が「初めて参加した」と回答しており、より多くの方にVフォーラムを伝えることにつながりました。また、分科会とフィールドワークの連動企画については、「その作業の役割などがある程度イメージして出来たので、楽しいと感じました。」との意見をいただきました。感想として、「非常に熱心な参加者の方が多く、いろいろなお考えを持ち活動されていることを知り大変参考になりました。」「グループ討議が多くいろいろな意見が聞けたのは良かったです。」との声もいただきました。

今回は、参加者のみなさんの声や想いを大切に、このフォーラムを誰でも参加できる市民活動・市民社会を考える機会にしようと分科会を企画してきました。テーマは「今こそ動こう！イロドリある未来へ」。これまでの私たちの歩みが、今の社会にどのような影響を及ぼしたかを問い直し、一人ひとりが輝くイロドリある未来に向け、さらなる一歩を目指す想いがこのテーマにこめられています。

## 分科会企画案の公募

これまでのVフォーラムにない視点や分野、課題を取り入れ、より幅広い社会的テーマで分科会を企画することをねらいとして、昨年度に引き続き、分科会企画案を公募しました。分科会企画案の公募が採用された場合も、案をそのまま実施するのではなく、公募の提案者も実行委員となり、他の分科会企画と同様、実行委員会で内容を検討し、多様な考え・意見を取り入れた上で、内容を磨き上げていきました。また、他の分科会についてもともに内容を検討し、Vフォーラム全体の運営にも関わっていただきました。

### 募集概要と実施結果

<p><b>【内容】</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・ボランティアフォーラムのプログラムの一つとして分科会企画案に基づいた社会課題の発信機会の提供</li> <li>・2020年2月7日（金）～9日（日）の内1コマ</li> <li>・予算は、30,000円まで</li> </ul> <p style="text-align: right;">など</p> <p><b>【条件】</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・月1回程度、平日夜間に開催される実行委員会への参加が可能であること</li> <li>・企画案をもとに、実行委員会の中で一緒に議論・検討し、企画を作り上げ、実施に向けて協力していけること</li> <li>・40名定員の会場内で実施できる規模の企画など</li> </ul> <p><b>【応募方法】</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・所定の企画書（A4サイズ2枚）に記載の上、郵送・メールにて申込み</li> </ul> <p><b>【応募期間】</b> 2019年5月17日（金）～6月10日（月）</p> <p><b>【結果通知】</b> 2019年6月14日（金）</p>	<p><b>実施結果</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・応募 7件</li> <li>・採用 4件</li> <li>・応募者所属内訳</li> </ul> <table style="width: 100%;"> <tr> <td>任意団体</td> <td style="text-align: right;">3人</td> </tr> <tr> <td>NPO法人</td> <td style="text-align: right;">2人</td> </tr> <tr> <td>一般社団法人</td> <td style="text-align: right;">1人</td> </tr> <tr> <td>高校生</td> <td style="text-align: right;">1人</td> </tr> </table>	任意団体	3人	NPO法人	2人	一般社団法人	1人	高校生	1人
任意団体	3人								
NPO法人	2人								
一般社団法人	1人								
高校生	1人								
	<p><b>選考のポイント</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・社会課題をテーマにした企画である</li> <li>・広く一般を対象にした企画である</li> <li>・多様な市民の参加が期待される企画である</li> <li>・本フォーラムで波及効果が期待される企画である</li> <li>・他団体との連携・協働が求められるような企画である</li> </ul>								



# **<第 2 章>**

## **実 施 編**

# 市民社会をつくるボランティアフォーラム TOKYO2020 開催概要

## 趣旨

「市民社会をつくるボランティアフォーラム TOKYO」は、私たちの暮らしに関わるさまざまな社会課題に焦点をあて、それを共有し、私たち市民にできることを考えていくためのイベントとして、2004年から開催しています。企画運営は実行委員会形式で、分野、地域、セクターを横断したボランティア・市民活動に関わるメンバーで組織しています。

今年のテーマは「今こそ動こう！イロドリある未来へ」。これまでの私たちの歩みが、今の社会にどのような影響を及ぼしたかを問い直し、一人ひとりが輝くイロドリある未来に向け、さらなる一歩を目指す想いが、このテーマに込められています。

参加者のみなさんの声や想いを大切にして、このフォーラムを誰もが参加できる市民活動・市民社会を考える機会にしていきたいと考えています。

## 開催概要

テ ー マ	今こそ動こう！イロドリある未来へ
開 催 期 日	2020年2月7日（金）19：00～21：00 2月8日（土）9：15～18：30 2月9日（日）10：00～18：30
会 場	飯田橋セントラルプラザ ほか
主 催	東京ボランティア・市民活動センター
企 画 運 営	市民社会をつくるボランティアフォーラム TOKYO2020 実行委員会
後 援	東京都、特定非営利活動法人日本 NPO センター
参 加 費	一般 2,000 円（1 分科会のみ参加の場合は 1,000 円） 学生（大学生・短大生・専門学校生等） 1,000 円 障害のある方 1,000 円 高校生以下、または 18 歳未満の方 無料 ※ フィールドワーク（No. 30、No. 31）に参加される方は、別途交通費。

**参加申込者数 377 名**

出演者 81 名

実行委員 27 名

運営スタッフ・ボランティアのべ 125 名

**参加者のべ数 919 名**

## スケジュールと会場

日	時間	会場	分科会
2月7日(金)	19:00~21:00	12階A会議室	1 SDGs～誰ひとり取り残さない～に向かって踏み出そう
		12階B会議室	2 自治会でつながろう！ ～地域活動への参加促進のために～
		12階C会議室	3 話しにくさを乗り越える対話の可能性を探ってみよう ～自由に考え、自由に話す哲学カフェ～
		12階D会議室	4 「食の安全性」×「地域」×「仕事」 ー持続可能な関係づくりとは
		10階A会議室	29 命と食と環境と。雑木林保全活動 ～映画『武蔵野』編～(30との連動企画)
	17:00~20:00	三ノ輪橋駅集合	31 多様な世代が関わる「食を通じた居場所づくり」(要事前申込) 荒川区内の「食を通じた居場所づくり」(子どもの居場所) 活動見学
2月8日(土)	9:15~9:45	10階フロア	5 オリエンテーション 「ボランティアフォーラム TOKYO2020」を300%楽しもう！
	10:00~12:30	12階A会議室	6 外国にルーツを持つ子どもと共に学ぶ学校とは
		12階B会議室	7 私たちは無自覚の差別とどう向き合うのか
		12階C会議室	8 あそびうたに触れ合おう♪～広がれ、あそび心！～
		12階D会議室	9 「ひきこもり」と言う言葉がなくなる社会を目指して!! ～わたくしごと化してみよう 「ひきこもり」・8050 (はちまるごーまる) 問題～
	10:00~13:00	聖蹟桜ヶ丘駅集合	10 家族ってなんなんだ!?!～映画『沈没家族』から家族のカタチを考える～
	14:00~16:30	12階A会議室	11 災害時の子どもや家庭を支えるために私たちができること
		12階B会議室	12 豊かな地域をつくるのは私たち! ～「地域包括ケアシステム」から制度・セクター・分野を超えて～
		12階C会議室	13 ボランティアのトリセツ～「ボランティア活動あるある」編～
		12階D会議室	14 映画『ナオトひとりっきり』上映&トークショー ～福島・人と動物、ぼくらはまだここに生きているぞ！～
10階A・B会議室		15 急増する孤独死は人ごとではない!!～年間3万人その現状とは～	
17:00~18:30	10階A・B会議室	16 話そうカフェ IRODORI (出入り自由)	
2月9日(日)	10:00~12:30	12階A会議室	17 イマドキの若者徹底解剖！
		12階B会議室	18 元気の種を探してみませんか？
		12階C会議室	19 想いをカタチに。助成で広がるボランティア・市民活動の未来
		12階D会議室	20 ダブルケア(子育て・介護)に今から備えよう ～個人・組織みんなで支え合う社会をめざして～
		10階A会議室	31 多様な世代が関わる「食を通じた居場所づくり」 ～ボランティアの入り口を「見る」×「聞く」×「体験する」～
		10階B会議室	21 政治を語って、暮らしやすい未来を創ろう！
	14:00~16:30	12階A会議室	22 体験から継続した活動へ ～ボランティア証明書で終わらない若者を育てるためのヒント～
		12階B会議室	23 発達障害がある大人×「周囲のあなた」=持続可能な就労環境？
		12階C会議室	24 盲ろう者も社会で安心して働けるようにするためには？
		12階D会議室	25 その「災害への備え」は自分事になっていますか？
		10階A会議室	26 私たちが本当に目指す居場所づくりとは ～これからの活動を考えるために組織を見直す～
		10階B会議室	27 ボランティアの「始まり」と「今」
17:00~18:30	12階A~D会議室	28 クロージング企画(参加費無料)～みんなでアクション！～	
2月8日(土)・9日(日) 10:00~17:00	10階フロア	32 Open Café (休憩スペース)	
2月8日(土) 10:30~15:30	1階区境ホール	33 ふれあい満点市場～NPO・NGOの作品展示販売～	
開催期間中いつでも	10階フロア	34 情報誌『ネットワーク』表紙原画展	

# 1 SDGs～誰ひとり取り残さない～に向かって踏み出そう

## 開催目的

誰ひとり取り残さないことを誓い、持続可能な社会に変革することを掲げたSDGs。2030年目標まで、あと10年となりました。でも、私たちはどんな「未来」をめざせばいいのか。本分科会では、SDGsを理解するレクチャーと、グループディスカッションを通して、私たちが描く未来を考えました。実際の行動に一步踏み出すきっかけの場づくりがねらいです。

## 開催日時

2月7日（金） 19:00～21:00

## 参加者数

35名（参加者28名、出演者1名、スタッフ6名）

## 出演者

久保田 将樹さん（一般社団法人SDGs市民社会ネットワーク）  
〈プロフィール〉

中学校・高校の教職経験の後、退職してクイーンズランド大学院（豪）で環境マネジメント学とサステナブル・ディベロップメントを学ぶ。2019年7月に卒業し、帰国後、SDGs市民社会ネットワークの専従職員として主にアドボカシー事業を担当

## 内容・成果・課題

分科会は、参加者の自己紹介から始まりました。参加者は、グループごとに座り、どんなことを分科会に期待するのかを共有しました。「SDGsが組織のなかで言われはじめ、SDGsへの理解を深めるために参加をした」といったコメントが、発言されました。

その後、講師である久保田さんからSDGsの解説がありました。

- ・ SDGsとは「Sustainable Development Goals(持続可能な開発目標)」の略称です。読み方は、SDGs（エス・ディー・ジーズ）。
- ・ SDGsは2015年9月の国連サミットで採択されたもので、国連加盟193か国が2016年から2030年の15年間で達成するために掲げた目標です。
- ・ 17の大きな目標と、それらを達成するための具体的な169のターゲットで構成されています。
- ・ 世界が持続しないという問題意識から作られました。



◎「みなさんが達成したい目標は？」  
SDGsが示す17の目標のうち、みなさんが一番達成したいと考える目標を選んで、共有しました。

「1. 貧困をなくそう」  
「3. すべての人に健康と福祉を」

ご自身が取り組む分野を背景に、ゴールを選択し、それぞれの理由をお話されました。

◎「逆に、選んだ目標を達成するために、一番

置き去りにされてしまうゴールは何でしょうか？」

久保田さんから、つぎに投げかけられた言葉でした。

例えば、「13. 気候変動に具体的な対策を」選択した場合、「8. 働きがいも経済成長も」という目標の取り組みは、減速してしまう可能性があるかもしれないという提起がされました。参加者自身も、それぞれが選択した目標について、議論をしながら、置き去りにされてしまいかねない目標を考えました。

## ◎2つの課題

### 1. 17すべてのゴールを考えなければいけないこと

SDGsの前身であるMDGs (Millennium Development Goals: ミレニアム開発目標)。開発分野における国際社会共通の目標でした。2000年9月にニューヨークで開催された国連ミレニアム・サミットで採択された国連ミレニアム宣言を基にまとめられました。MDGsは、極度の貧困と飢餓の撲滅など、2015年までに達成すべき8つの目標を掲げ、達成期限となる2015年までに一定の成果をあげました。その内容は後継となる持続可能な開発のための2030アジェンダ(2030アジェンダ)に引きつがれています。

しかし、MDGsは取り組みやすい課題は解決に向かって進んでいった一方で、取り組みにくい課題については、大きな進展はありませんでした。その反省をもとに、SDGsは17すべての目標に取り組んでいくことが重要です。

### 2. バックカスティングで取り組もう

未来の姿から逆算して現在の施策を考える発想をバックカスティングといいます。現在、日本の取り組みの多くは、現状からどんな改善ができるかを考えて、改善策をつみあげていくフォアカスティングになっています。

「誰一人取り残さない」というSDGsの理念を基本に、高いレベルの「2030年目標」を掲げることが不可欠です。その達成のために、グローバル指標に基づく各ターゲットの現状と目標のギャップを分析して評価し、目標の実現に向けて資金を配分し、取り組みを進めていく「バックカスティング」を大胆に取り入れていくことはさらに必要不可欠です。



#### 【振り返り】

「2030年まであと10年しかありません。」講師から発された言葉でした。SDGsは何か?という知るフェーズから、実行フェーズに移っていると思います。持続可能性を持続可能性に変化させていくための、重要な課題提起が分科会で行われました。

## 参加者の声(アンケート結果などから)

- ・ SDGsを詳しく書かせていただきました。1つを解決しようとするすると反対のものが達成できなくなるなどの、気をつけなければならないものを教えていただき、参考にしたいとおもいます。
- ・ 実際に2030の姿を考えることで、各々のステークホルダーの存在や何をすべきかを他者と共有しながら考えられてよかった。

## 企画・運営

上田 英司(日本NPOセンター)【主担当・報告書】

水田 征吾(調布市市民活動支援センター 運営委員)

## 2 自治会でつながろう！～地域活動への参加促進のために～

### 開催目的

近年、地域や近隣とのつながりがもてない、隣近所に住んでいる人がどんな人だかわからない、自治会や地域活動に勧誘しても参加してもらえないといった悩みを持った方が増えています。このような状況下では、地域で困り事が起きた時や災害時に円滑な援助ができない可能性があります。当分科会では、近年課題となっている自治会への加入率低下を切り口に、自治会や地域活動への参加促進をどのように行っていくかを検討しました。

### 開催日時

2月7日（金）19:00～21:00

### 参加者数

19名（参加者14名、出演者2名、スタッフ3名）

### 出演者

長沼 豊さん（学習院大学文学部教育学科教授）

佐藤 良子さん（立川市大山自治会相談役）

### 内容・成果・課題

当分科会の前半では、長沼豊さんより、ボランティアの視点から自治会の加入者をどのようにして集めれば良いかについて話がありました。自治会加入者はいわゆるボランティアであり、そのボランティアをどのようにして集めれば良いかという話がありました。まず、ボランティアは「感」を大切にしているということ、つまり、利益やメリットで行うのではなく、「活動が楽しい」「他者から感謝される」といったことがボランティア参加のきっかけとなるという話がありました。

また、自治会や地域活動に勧誘する際には、「加入しなくてはならない」「加入しないとこういう問題が起きる」など、デメリットを強調する文言が使われることがあります。しかし、本来ボランティアとは、前述のように、楽しく活動することが前提となります。そのため、自治会加入者や地域活動への参加を増やすためには、自治会の活動がいかに魅力的かをアピールする必要があります。そのためには、地域住民にとって、自治会の活動自体を魅力的にする必要があります。例えば、自治会の運営が一部の役員のみで行われている、毎年活動内容が一緒という状況では、「自治会や地域活動に貢献しよう・手伝おう」という気持ちが起きにくくなります。そのため、自治会の運営に関しては、若い人の意見も聞くこと、地域のニーズを把握し必要なサービスを提供することなどにより、サービス提供の幅を広げることができます。さらに、「地域に貢献できた」という満足感、達成感を得ることができます。そのような活動を継続していくことにより、地域での自治会の必要性が認識され、加入者も増えていくのではないのでしょうかといったお話をして頂きました。

後半は佐藤良子さんより、自治会加入率向上のための具体的な方法についてお話しして頂きました。佐藤さんの所属する立川市大山自治会では自治会加入率100%を継続しており、全国のモデルケースとなっています。冒頭では、大山自治会の活動の様子を紹介したDVDを鑑賞しました。その中では、自治会加入者が隣近所で声をかけあう姿や食べ物のお裾分けをしている様子が写っていました。さらに、普段からの声かけを実施していたことにより、自宅で倒れていた方を発見し、一命を取り留めたという事例も紹介されていました。

大山自治会では、子育て世代向けの相談窓口や、葬儀費用が出せない方向けの葬儀実施、若い世代の意見を取り入れた運動会の実施など、地域のニーズに合わせた様々な取り組みを行っています。具体例としては、地域の方から「駅から大山団地に向かうバスの最終便が早く、夜に利用できない。タクシーを利用するとお金が高くつく」という意見がありました。そこで、夜間バスを運行する場合の利用人数を調査し、バス会社への働きかけを継続しました。その結果、臨時バスの運行を実現しました。また、

自治会の勧誘に関しては、新しく引っ越してくる方のお宅に訪問し、自治会加入のメリット等を伝え、加入を促すとのことです。その際には、定期的に発行している地域新聞や、自治会加入のメリットが書いてあるパンフレットの配布などを行うそうです。

佐藤さんによれば、自治会の加入者を増加させるためには、役員だけで運営せず、あらゆる世代、団体を巻き込むことが大切とのことです。例えば、近くの大学と連携し、大学生のボランティアを募り、地域活動に参加してもらうそうです。これにより、サービスの幅が広がるだけでなく、一部の役員のみ負担がかかるという問題も解決することができます。

このように、大山自治会では、住民一人ひとりの意識に寄り添った地域作りを行っているとのことでした。これらのお話の途中ではクイズも行われ、正解者には大山自治会で作った景品をプレゼントするなど、終始和やかな雰囲気で行われました。

以上のように、本分科会では、自治会・地域活動の概要から具体的な事例までご紹介しました。参加された皆様にとって有意義な時間となったならば幸いです。



### 参加者の声（アンケート結果などから）

- ・活動の理論や、具体的な方法論などが聞けて、とても参考になりました。
- ・自治会の成功例、また若い方に興味を持ってもらうにはどうすればよいのかという点を興味深く聴かせていただきました。
- ・同じ都民として生活している中で、自身の住む地域・自治会をより良いものにするための精力的な活動を知ることができて学ぶことが多いお話でした。

### 企画・運営

小林 理人（青梅市社会福祉協議会 青梅ボランティア・市民活動センター）【主担当・報告書】  
神元 幸津江（NPO 法人全国災害ボランティア支援団体ネットワーク（JVOAD））

### 3 話しにくさを乗り越える対話の可能性を探ってみよう ～自由に考え、自由に話す哲学カフェ～

#### 開催目的

「話したいことが話づらい」という経験は誰しもあると思います。これを乗り越える方法として「哲学カフェ」というものがあります。哲学カフェは、応答的な対話を通じて自分の考えを深めることを楽しむ方法で、哲学の知識は不要です。今回は「市民社会と政治」をテーマに、多様な見方があることを参加者同士の対話を通じて知る機会としました。

#### 開催日時

2月7日（金）19:00～21:00

#### 参加者数

26名（参加者22名、出演者1名、スタッフ3名）

#### 出演者

角田 将太郎さん（NPO 法人こども哲学・おとな哲学アーダコーダ 代表理事）

#### 内容・成果・課題

<内容>

##### 1 角田さんとアーダコーダの自己紹介

アーダコーダは、正解のない問いについてグループで考える哲学対話の実践的なプログラム(哲学カフェ)を提供するNPO法人。角田さんは大学時代に哲学を専攻していましたが、難解で役に立たないものという哲学についての世間的なイメージに対して、哲学することの魅力伝えるために在学中から活動、今では哲学カフェのファシリテーターとして活動しています。



##### 2 参加者の自己紹介

次に、参加者同士で輪になって、一人ずつ自己紹介をしました。この際に使ったのが「発言権ボール」。このボールを持っている人だけが発言できるというルールで、これにより様々な意見が同時に飛び交うことを防ぐことができ、対話の安全が守られます。参加者の属性は、所属も年代も非常に多様でしたが、哲学専攻だった人が比較的多い、哲学カフェ体験者や関心ある人が数名ずついる、などの特徴がありました。



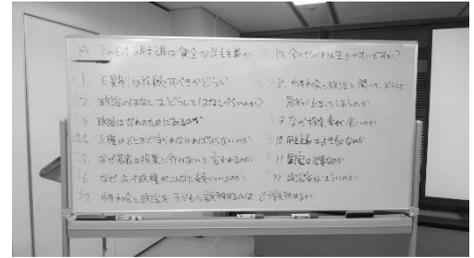
##### 3 哲学カフェについて

実際に哲学カフェを体験する前に、角田さんより、心構えについてお話いただきました。参加者側の心構えとしては、①「ゆっくり取り組む」（沈黙も大歓迎）、②「自分の言葉で話す」（人からどう思われるかは気にしない）、③「他の人の意見を受け止め、じっくり聴いてみる」（自分の意見に固執しない）、④「変化を楽しむ」（自分の意見が変わることも大歓迎）などのことがあります。

しかし、前提として、哲学カフェは議論が安全に行われるしくみと言います。その理由としては、①「無知の下の平等」（参加者の中で誰が素人か専門家か判断がつかないので自由に発言できる）、②「脱線してもOK」（ゴールがないので話題が変わってもいい）、③「頭の中で違うことを考えていてもOK」（何より自分で考えることが重要）の3つがあります。

#### 4 問い出しをする

哲学カフェ体験に入ります。まず、哲学カフェで話し合うテーマを参加者で出し合いました。大きなテーマは「市民社会と政治」でしたが、そこからみんなの意見で話が深まっていきそうな話題を出し合い、それらの中から挙手してもらってテーマをひとつに決めました。人権・投票率・民主主義・国家など多様な意見が出されましたが、決まったテーマは「市民社会と政治と聞いて、どうして思考が止まってしまうのか」でした。



#### 5 哲学カフェを体験してみる

上記で出たテーマについて、もう一度参加者同士で輪になってもらい、角田さんを進行役に、発言権ボールを使いながら哲学カフェを体験してみました。

参加者からの主な発言としては、「リアルな生活と政治が結びついていないからではないか」「政治には触れないようにしてきた、触れない方が楽」「昔は政治運動をやっていたが、今は参加する場がない」「投票率の低さは若者のせいだけなのか」「学校で教わっていないのに、卒業して急に問われても難しい」「ネットで情報収集・情報発信できるようになってずいぶん変わったのでは」「そもそも考えるためのデータが出てきていない」「学校の中でもみんな議論して考えている」など、多様な意見が次々と飛び交いました。



#### 6 振り返り

最後に、参加者同士で哲学カフェ体験の振り返りを行いました。その中では、「発言権ボールや脱線OKというルールに安心できた」といった感想のほか、「(質問) 発言者が偏っていたがそれでよいのか? → (回答) 権利は保障されているので、発言しなくてもOK、むしろ発言を受けて考えることが重要」「(質問) 進行役がもっと話を引き出すべきでは? → (回答) 積極的に話を引き出したりするかどうかは進行役のタイプ次第(ちなみに角田さん自身は間も重要と考え、話が出てくるのを待つタイプ)」との質疑応答がありました。

#### <成果および課題>

- 参加者の意見を積み上げたり捨ったりしていくワークショップ型とはまた異なる進め方で、そちらの手法に慣れている自分としては最初戸惑いも感じましたが、意見交換のひとつの手法として自分自身とても参考になりました。
- 下手をすると参加者が不完全燃焼のまま終わってしまいかねないので、議論の時間を十分に取ることが大切ではないかと思いました。

#### 参加者の声(アンケート結果などから)

- ほんの入り口だったと思いますが、体験でき、哲学カフェのことを知れてよかったです。私は、もっと少人数の方が心地よく感じて考えが深まりやすいということも発見でした。自分でも何かの形でやってみたいと思います。ありがとうございました。
- 脱線こそ話の糧というのは、新鮮でした。面白時間をありがとうございました。若い人がいて、視点の違いがあったのが良かったと思います。
- 哲学カフェ初体験。政治の話になると思考が止まってしまう。よいテーマでした。ボランティアとは関係ないかな、と思っていましたが、おおいに関係あるのでは? まだまだよく考えたい。

#### 企画・運営

市川 徹(株式会社世田谷社/一般財団法人世田谷コミュニティ財団)【主担当・報告書】  
福永 理紗(かえつ有明高等学校2年)

## 4 「食の安全性」×「地域」×「仕事」 —持続可能な関係づくりとは

### 開催目的

人の体は「食」で作られ、食は「人」が作ります。破棄していた貝に、あたらしい価値を生み出した菊池博文さん。障がいのある方たちと食を通じて、仕事を作り出している須賀さん。どちらにも、私たちの普段意識していない循環が、人や場を介して生まれています。

地域で「食」を通じて人をつなぐ、共感し合える「居場所」、「コミュニティ」を生み出していく多様な活動が、さまざまな地域課題の解決のきっかけになっています。この先の社会に食の安全性や価値観を伝え、このような持続可能な地域づくりについて一緒に考えてもらいたいと企画しました。

### 開催日時

2月7日（金）19:00～21:00

### 参加者数

24名（参加者17名、出演者3名、スタッフ4名）

### 出演者

菊池 博文さん（H3FoodDesign）

須賀 貴子さん（NPO法人ワーカーズコープ森の102（とうふ）工房）

### 内容・成果・課題

菊池さんから、H3FoodDesignというユニットで、新しい働き方と課題解決を地域の中でどう実践しているのか、東北地方の三陸を中心に報告して頂きました。

2019年6月、「三陸防災復興プロジェクト」の一環として、世界の三大漁場である三陸の豊かな自然と食材を国内外のシェフや地元の生産者や料理人とともに“再発見”する「三陸国際ガストロノミー会議2019」を開催しました。

沿岸地域の食材生産者を4日間にわたって視察する

「三陸と世界をつなぐ食のキャラバン」、国内外のシェフと地元料理人とのコラボレーションで三陸を発信する料理、シンポジウムなど、その時の様子をまとめた映像を見せて頂きました。映像は、デザイン性、メッセージ性ともに高く、改めて発信することの大切さを感じました。

大都市より、自然環境に負荷をかけずに食材を生産出来る地方のほうが、ガストロノミーの実践がしやすく、その中でも東日本大震災を経験した東北地方は、自然との共生や持続可能な地域づくりの発信により有効だということが分かりました。

2011年震災以降、人口激減、少子高齢化、ドーナツ化現象、残業による生活の質の低下などライフスタイルが激変しています。そのような社会の中で、これからは、コミュニケーションのボトムアップ、価値観を競争から「共創」へ変えていくなど、それぞれが目指す多様性のあるライフスタイルを描くことが課題になってくるのではないかと思います。



須賀さんからは、森の102（とうふ）工房での困難のある方や障がいのある方が働けるように豆腐製造から始まり、障害者就労継続支援B型を立上げて、菓子工房、農作業、地域の仕事へ広がってきている取り組みの報告がありました。

事業所で大切にしてきたことは、全員が仲間であるということです。困難な仲間を中心に据え、どうしたら働きやすいかを考え続けたそうです。そして、毎月の会議で経営報告、経費削減や売上増加について全員で話し合うことを大切にしてきました。

仕事は、何よりも楽しいこと、美味しいことを大切にしています。障がいがあっても、楽しい仕事、やりがいのある仕事、人の役に立つ、感謝される仕事を求めています。また、自分たちがやりたい仕事をできる限り作り出すようにもしています。事業所では、内職仕事は極力行わず食べることにする仕事を選択するようにしています。具体的には、地元のお土産品であるおせんべいの袋詰めや近所の珈琲焙煎所の豆の選別、地元電車整備会社から依頼があった電車クッキーの製造や飯能の酒蔵と連携して日本酒のシフォンを製造、販売したりしています。

そして、地域の中で仕事をつくることも大切にしていることの一つです。生活クラブが母体となっているライフファームさんとは、共同生産を行っています。今年度、生産したものは、鶴首カボチャとアキマサリ（大根）、姫落花です。鶴首カボチャは、一度ライフファームに出荷し、地元のタミー食品さんで加工、その後生活クラブでの共同購入や、森の102（とうふ）の菓子工房で加工、あるいは地元飲食店で加工して販売しています。これからは、加工品の開発、販売などの販路が課題です。

分科会を終え、日ごろの暮らしの足元から自分に出来ることから始めることが大切だと感じました。自分自身の食生活を見直すことにより、社会の仕組みを変えていくことも出来るのではないかと思います。

地域で色んな立場の人が協力して、課題に対して一緒に試行錯誤をすることで、ヒト、モノ、資源の循環ができ、地に足を付けて豊かでしあわせに暮らすことが可能になるように感じました。



## 参加者の声（アンケート結果などから）

- ・食と地域のつながりの可能性、地域での仕事づくりをどう広げていくのか知ることが出来ました。
- ・“食”と“地域”について大学で学べるような学部を探してみようかなと思いました。
- ・大事にすべきことを、それぞれが迷いながらも見つけていると聞いて元気を頂きました。

## 企画・運営

牧野 斉子（NPO 法人ワーカーズコープ）【主担当・報告書】  
鈴木 正昭（りすこ（おおた復興支援活動連絡協議会））

## 5 オリエンテーション 「ボランティアフォーラム TOKYO2020」を300%楽しもう！

### 開催目的

オリエンテーションは、フォーラムの参加が初めての方も、ベテランの方も、分科会に参加する以上にフォーラムを楽しめるようにするための試みです。前半は、分科会や特別企画の楽しみ方を、フォーラムのテーマに込められた想いを交えて、フォーラムの実行委員が解説しました。後半では、フォーラムに対する多様な期待と希望を持った参加者が意見を交換し、フォーラムをもっと楽しめるきっかけを作りました。

### 開催日時

2月8日（土）9:15～9:45

### 参加者数

34名（参加者30名、スタッフ4名）

### 内容・成果・課題

土曜日の早い時間にもかかわらず、30名もの人がオリエンテーションに参加しました。オリエンテーションは大きく二つの部分に分かれており、前半は解説、後半は参加者同士の意見交換の場となりました。

前半の解説部分では、フォーラムの実行委員が参加者に配布される当日資料を使いながら、記載されている基礎情報の説明だけでなく、フォーラムの趣旨やそこに込められた想いを交えながら解説しました。また、ふれあい満点市場やオープンカフェ、話そうカフェ IRODORI やクロージングなど、分科会以外にも、参加者が楽しめる特別企画について案内と説明を行いました。

後半部分では、参加者が3人1組となり、お互いにどの分科会に出る予定なのか、なぜその分科会に参加しようと思ったのか、その理由と期待を話し合っていました。これまで関心が薄かったテーマや、どうしてもスケジュールの関係で参加できなかったテーマの分科会に参加する方を見つけて、分科会の合間や終了後にそれぞれが参加した分科会の報告ができるきっかけになったのではないのでしょうか。また、同じ分科会に参加する予定の人同士でも、なぜその分科会に参加しようと思ったのか、その背景は様々です。多様な背景や想いを知ることが、今年のフォーラムのテーマである「イロドリある未来」につながる道であり、オリエンテーションと一緒に「動く」仲間やきっかけを見つけることができたのではないかと大いに期待しています。

オリエンテーションに参加したことで、分科会を楽しみ、分科会以外の企画も楽しみ、多様な参加者との繋がりを楽しむことができたなら、300%以上の満足と成果を持ち帰ることができたことでしょう。



## 企画・運営

---

五十嵐 豪（認定 NPO 法人難民を助ける会（AAR Japan））【報告書】

神元 幸津江（NPO 法人全国災害ボランティア支援団体ネットワーク（JVOAD））

小林 理人（青梅市社会福祉協議会 青梅ボランティア・市民活動センター）

榎本 朝美（東京ボランティア・市民活動センター）

## 6 外国にルーツを持つ子どもと共に学ぶ学校とは

### 開催目的

全国の学校で学ぶ外国にルーツを持つ子どもは年々増加していますが、不十分な日本語指導体制や進学・就職の壁などさまざまな問題がクローズアップされています。日本で学校教育を受けた外国にルーツを持つ若者と若者世代の支援者の話を聞き、多様な文化的背景を持った子どもと共に学び、共に成長する学校のあり方を考えるために企画しました。

### 開催日時

2月8日（土）10:00～12:30

### 参加者数

28名（参加者21名、出演者4名、スタッフ3名）

### 出演者

ナディさん（『ふるさとして呼んでもいいですか 6歳で「移民」になった私の物語』著者）  
アウン・ゾウ・ピエさん/アウン・ゾウ・パインさん（ユーチューバー）  
人見 美佳さん（日本語教育行政職）

### 内容・成果・課題

- 『ふるさとして呼んでもいいですか 6歳で「移民」になった私の物語』の著者であるナディさんの話  
周りの助けを得ながら、日本語や学力を身につけていった過程、日本の学校文化の中で、どのように学校生活をすごしたかご自身の体験を話してくださいました。その後、3つの大切な視点を伝えていただきました。一つ目の視点は、「外国ルーツの人の目線や意見が、昔から続けている習慣を見直し、よりよいしくみを考えていくきっかけになるのではないか」というものでした。かつて着用義務があったブルマや完全給食、PTAのしくみなどを例にとり、「こうした習慣は、よく考えると合理性があるとは言えず、惰性で行っていて、時代にあわなくなっている可能性がある。外国人の目線が、あたりまえだと思っている習慣をあらためて考え直すきっかけになるのではないか」という重要な指摘でした。二つ目は、個人ができることには限界があるので、個人に頼らない仕組みが重要だという指摘でした。思いのある先生個人が、子どもの母語を勉強したり苦手な外国語で一生懸命コミュニケーションをとったりして、疲弊してしまう現状があるそうです。「結果的に外国ルーツの子どもを受け入れるのは大変だというネガティブな感情につながる危険性がある。支援の仕組みを制度化すべきではないか」という指摘でした。三つ目は、真の多様性とは何かという大変重要な視点でした。外国ルーツの子どもの支援者は「外国ルーツの子どもは日本語ができなくて大変だ」という課題一点に陥りがちですが、ナディさんに「日本人」と「外国人」とわけのではなく、「目の前の人は何に困っているのかを理解し、その困り事に対し、自分は何ができるのか、何をするのかを考える姿勢が多様なのでは」という問題提起をいただきました。
- アウン・ゾウ・ピエさん/アウン・ゾウ・パインさん（ユーチューバー）の話  
来日直後、ひたすら授業中、ひらがな・カタカナを書いて過ごしたこと、友だちとの会話やテレビで日本語の会話を覚えていった話がありました。友だちの会話はわかるようになっても、授業で教師が話す日本語はまったくわからず、「お経」のように聞こえたそうです。当時は、外国ルーツの子どもは少なく、日本語の支援は全くなかったそうです。クラスメートの中には外国人と言う理由でいじめのようなことをしてくる子もいましたが、日本語がまもらないため言い返せないこともあったという話をしてくださいました。中学校での勉強では、授業を理解している前提で進んでいき、先生はカリキュラムをこなすことに必死で、理解できないまま進んでいってしまい、とても大変だったそうです。一方で、進学した定時制の高校は、半分が外国ルーツの生徒で、多様性に富んでいて、授業は生徒の理解を確認しながらすすんでいたため、テストの点数は上がっていったという話がありました。

現在、都立高校の定時制は統廃合の流れにあり、彼らが卒業した小山台高校定時制も廃校の話があがっているそうです。彼らは、得意な映像で高校を存続させるための活動をしています。最後に、外国ルーツの生徒たちへの学校での理解は深まっているけれども、日本語がわからない子どもたちにより配慮した教材作成や、子どもたちの気持ちをよく聞いてよりそってほしいという話がありました。

### 3. 人見美佳さん（日本語教育行政職）の話

人見さんからは、ナディさん、ピエさん、パインさんの話をうけ、日本語教育行政職の立場から現場の「今」の話がありました。ナディさんは25年前、ピエさん、パインさんは15年前の小学生時代の話をしてくださいましたが、その時代から変わったこと、変わっていないことをわかりやすく話してくださいました。まず、学校現場の日本語教育体制についての説明がありました。日本語支援の期間、基準、支援者（加配教員、日本語教員、日本語ボランティア等）は、予算や日本語指導が必要な児童・生徒数によって、自治体によってさまざまであることがわかりました。中には、今でもピエさん、パインさんが経験したように日本語の支援が全く届いていない学校もあるそうです。一方で、変化の兆しが見られます。一点目が、2014年度に日本語教育を公立の小中学校で「特別の教育課程」として位置付けられるようになったことです。これにより、教育委員会が日本語教育を「特別の教育課程」として実施すると決定すれば、学校はカリキュラムを組んで学校生活を含め子どもたちの状況を把握する必要があります。ただ、「できるようになった」のであって、「やらない」と決定すれば、「特別の教育課程」を実施しなくてもよいということになります。現実には、学校の負担が多く、実施率は非常に低いそうです。また、昨年6月、「日本語教育の推進に関する法律」が交付、施行されました。この法律で日本語教育の対象者の一番目に「幼児、児童、生徒」があがっており、国も子どもたちの日本語教育が重要だと認識している現れと言えるという話がありました。

### 4. グループディスカッションと発表

5つのグループにわかれて、「どのように学校や社会が変われるか」「これから自分ができること」に関して活発なディスカッションが行われました。教育に関わる仕事をめざす若い世代の参加者からは、貧困などの社会課題に加え、外国ルーツの子どもの課題があることがわかり、今日学んだ視点を今後生かしていきたいという頼もしい発言がありました。



### 5. 成果

教員、日本語講師、会社員、学生などさまざまな方が参加しており、分科会の最後には、参加者同士がつながる場面がみられました。セクターを超えてつながることで、また新たな市民活動がうまれるのではという希望がみえた分科会でした。

## 参加者の声（アンケート結果などから）

- ・外国ルーツの方から実際にどのような問題を抱え、その問題にどう対応してきたかお話を聞くことができ、とても参考になりました。
- ・過去～現状までの日本語教育について知れた。実体験を踏まえた今後の教育に求めることはとても説得力があった。
- ・日本語教育関係者だけでなく、色んな活動をされている方、分野の方がこのテーマに関心を持っていることを知る機会にもなりました。一方で外国のルーツを持つ人たちと言っても個々背景も全く違う。「日本人だから」「外国人だから」というそのものを取っ払いたいです。

## 企画・運営

柴山 智帆 (glolab) 【主担当・報告書】

五十嵐 豪 (認定 NPO 法人難民を助ける会 (AAR Japan))

## 7 私たちは無自覚の差別とどう向き合うのか

### 開催目的

日常の中の「無自覚の差別」に意識を向け、参加者の方がそれらの差別に自覚的になる機会を作りたいと考えたことが、開催のきっかけでした。

### 開催日時

2月8日(土) 10:00~12:30

### 参加者数

27名(参加者22名、出演者1名、スタッフ4名)

### 出演者

末永 幸代さん(かえつ有明高等学校)

### 内容・成果・課題

～内容～

本分科会では「無自覚の差別」をテーマに、少人数の(4~5人)の班で対話型のワークショップを実施しました。

(この分科会においては、無自覚の差別を「誰かを傷つけてしまう可能性のある悪気のない言葉や行動のこと」と定義しています。)

当日は、「参加者の方に無自覚の差別への向き合い方を創出してもらうこと」を分科会を行う上でのゴールとして、ゲストの末永さんの体験例を交えながらテーマを3段階に設定しワークを行いました。まず1つ目のテーマは「無自覚の差別について考える」です。

無自覚の差別と言っても、その言葉を聞いて思い浮かぶシーンは人によって様々だと思います。そこで、一人では気づくことの難しい無自覚の差別にまで目を向けてもらうことを目的に、どのような無自覚の差別があるのかを班ごとにブレインストーミング・共有する時間を設けました。さらに、各々の班で出た意見を全体で共有する時間も設け、様々なケースにおける無自覚の差別に気づいてもらうことを目指しました。

ワークの2つ目は、「解決方法を探ってみる」です。ここで



は、1つ目のワークで拳がったシチュエーションを改善、解決するための方法を班ごとに考え、話しあってもらった時間としました。問題の構造によって関わり方や改善のための行動は変わってくると思います。そのため、具体的な状況を設定してもらい、問題に合わせた解決策を考えていただきました。最後のワークでは、「無自覚の差別との関わり方を模索する」をテーマとし、参加者の方一人一人にこれからどのように無自覚の差別と関わっていくのか、について考えていただきました。過ごされている環境がそれぞれ違うからこそ、参加者の方の生活に引きつけて考えられるテーマにしました。

～成果～

無自覚の差別に意識を向けてもらう、また分科会でのワークを通して簡単には無くすことのできない無自覚の差別とどのように向き合うのかを考えてもらうという目標は達成できたと感じています。

さらに、世代や所属を超えた話し合いを通して、無自覚の差別に対しての視野を広げていただく機会に出来たのではないかと考えています。

～課題～

「無自覚の差別」という非常に繊細なテーマを取り扱うため、参加者やワーク内容に十分に配慮をし、またこの場限りにならないようなワーク設計を行うことが必要だと感じました。

## 参加者の声（アンケート結果などから）

---

- ・ 普段自分と似通った人以外とはあまり話す事の出来ないテーマについて話すことができ非常に良い機会となった
- ・ 当事者、非当事者両方の立場の方と建設的な意見交換が出来た
- ・ 無自覚の差別というワードにはっとさせられた

## 企画・運営

---

福永 理紗（かえつ有明高等学校）【主担当・報告書】

高橋 義博（府中市市民活動センター プラッツ）

## 8 あそびうたに触れ合おう♪～広かれ、あそび心～

### 開催目的

---

保育・児童館、こどもたちと関わる現場で、こどもたちのあそび心を広げるために、数多くの手法を用いながら実践していると思います。しかしながら、遊びの展開をどのようにアプローチしていいのか悩むことや困ることがあると思います。

そこで、本分科会では普段とは違う視点で遊びが展開できるあそびうたを切り口に、遊びをアレンジし、自由に遊ぶことの楽しさを体感していただきたいと思い、企画しました。

また、こどもと関わる機会がなくても、あそびうたの存在を知ってもらうことも重要だと考え、そのきっかけ作りしたいという目的を含んでいます。

### 開催日時

---

2月8日(土) 10:00～12:30

### 参加者数

---

21名(参加者16名、出演者1名、スタッフ4名)

### 出演者

---

杉川 としひろさん(あそびうた作家/絵本作家/ウタイグミ主宰)

講師プロフィール:

鳥取県出身の元保育士。

担任していたこどもたちのつぶやきをきっかけに、オリジナルの歌作りを始める。あそびうたのパイオニア・湯浅とんぼさんとの出会いをきっかけに、保育雑誌での連載や楽曲提供、保育士向けの講習会などを行うようになる。

現在は関東を中心に、保育園や幼稚園、子育て支援でのミニコンサートや、保育士・幼稚園教諭向けのセミナーなどを行っている。

### 内容・成果・課題

---

#### 1. あそびうたとは

はじめに、子育てや保育現場を踏まえ、あそびうたの本質について、杉川さんに語っていただきました。

保育期は遊びを通して、のびのびと育ててほしいが、こどもは大人の決めたルールの中で生きているため、その枠内でしか遊べていません。そして、こどもはその枠に納まろうとするため、自分らしさがなかなか出せず、自己肯定感が低くなります。こうした現状をよりよくするためには、大人がこどもの声をどれだけ聞けるか、どのくらいコミュニケーションが取れるかがポイントになります。そこで、大人とこどもが気軽に触れ合うことができるあそびうたが効果的だと考えています。

あそびうたにはきちんとした定義がありませんが、その魅力としては歌詞、メロディー、遊び方を自由にアレンジできることです。こどもと一緒に遊びを作り、考え、試す。成功もあれば失敗もありますが、そこには大人とこどもの両方に学びがあります。自分を表現することで自信が生まれ、自己肯定感にもつながっていきます。「遊んで楽しい」のはもちろんのこと、あそびうたには保育に大切なことがギュッと詰まっています。

#### 2. あそびうた体験タイム

出演者のあそびうた(オリジナル曲を7～8曲ほど)を披露していただき、どのようにアレンジをするかレクチャーしていただきました。いきなりアレンジすることはハードルが高いので、曲のメロディーラインは固定にし、歌詞、手振り、身振りのアレンジを一つひとつ加えていき、参加者の自由な発想

を徐々に引き出していきました。最終的にはたくさんのアレンジが生まれ、自身が楽しめる空間となっていました。

### 3. 自由交流タイム

参加者同士の交流ができるように、自己紹介や分科会への参加理由をきっかけに自由にお話をさせていただきました。お菓子を食べながら、和気あいあいと楽しそうな雰囲気で行うことができました。横のつながりやお互いの活動等を知るいい機会になったのではないかと考えています。

### 4. まとめ

全員が遊びの手段やコミュニケーションを求めて参加したことが自由交流タイムでわかり、参加者の目的意識がとても高いと感じました。そして、アンケートでも「満足」の声を多くいただけたので、内容が参加者の目的にマッチしていたと考え、本分科会の目的を達成できたと思っています。また、あそびうたの動画を撮っている人が多く、自身のフィールドで今回得たあそびうたにさらなるアレンジを加えていくことを期待しています。

## 参加者の声（アンケート結果などから）

- 手軽にこどもと遊べて楽しめるうたがよかったです。この遊びでこどもが新しい発想でみんなから評価され、自己肯定感が育まれることがわかりました。
- こどもだけでなく、高齢者の集まりにもみんなに大うけすると思います。いただいたプリントの他にアレンジの方法も教わったので、早速アレンジして使わせていただきます。
- 学生への指導（キャンププログラムも受け持っている施設）であるため、アイスブレイキングの中に手遊びやあそびうたを取り入れるヒントになりました。動画もたくさん撮らせていただいたため、参加できなかった職員にも共有していきたいです。
- 音楽には苦手意識があったのですが、本日はとても楽しく遊ぶことができました。
- 他とは色が違って楽しかったです！たのしいが感想の一番に出てきて少し新鮮でした。
- 素直に楽しむことを思い出させてくれました。単純でそして手と手をあわせたり、ふれあったりすることだけでも何か少し心がほぐれる感じがしました。最後の絵本が良かったです。



## 企画・運営

犬塚 尚樹（NPO 法人ふれあいの家 おばちゃんち）【主担当・報告書】

鈴木 正昭（りすこ（おおた復興支援活動連絡協議会））

小林 理人（青梅市社会福祉協議会 青梅ボランティア・市民活動センター）

# 9 「ひきこもり」と言う言葉がなくなる社会を目指して！！ ～ わたくしごと化してみよう

## 「ひきこもり」・8050（はちまるごーまる）問題 ～

### 開催目的

全国の15歳から64歳までの「ひきこもり」の推計は、115万人（2018年 内閣府調査）を超えており、社会問題となっています。こうした背景には「学校」「職場」「社会」など身近な環境が原因となっていると言われており、どんな方でも「ひきこもり」のリスクを抱えています。

分科会では、経験者・支援者の話を聞き、問題の理解やどのような支援・活動ができるのか、参加者一人ひとりが考え、明日から一歩前に踏み出すきっかけとなることを目的としています。

### 開催日時

2月8日（土）10:00～12:30

### 参加者数

33名（参加者25名、出演者3名、スタッフ4名、その他1名）

### 出演者

馬場 佳子 さん（一般社団法人OSDよりそいネットワーク代表理事）

池田 佳世 さん（一般社団法人OSDよりそいネットワーク代表理事）

マコトさん（ひきこもりを経験された方）

### 内容・成果・課題

#### 1. 内容

##### 1) 馬場さん、池田さん（OSDよりそいネットワーク）の話

馬場さん、池田さんは「ひきこもり」の当事者やご家族をはじめ、生きづらさを抱えている方々のひとり一人が、安心して暮らしていける社会の実現に向け支援活動を展開されています。そうした経験の中で感じた「ひきこもり」の背景、課題を話していただきました。

背景には、① 学校や家庭、会社での人間関係 ② 不況などの社会的な影響 ③ 自己肯定感の低い国民性や社会の同調圧力 などが主因となっており、「いつ、誰にでも、ひきこもりとなるリスクがある」と統計データ等を用いながらお話をされました。とりわけ、日本は「単線社会」となっており、人と違う生き方をする人を排除する傾向や排除された側も「人に迷惑をかけたくない」とする意識がはたらいている。こうした問題が数十年にわたり固定化され「ひきこもり」の高齢化「80・50」につながっているとの指摘をされました。

課題では、①「生き方の多様性」を認めること ② 身近な問題として多くの人が共有、共感すること③ 相談しやすい環境を作ることが求められているとするお話がありました。

締めくくりとして、相手への寄り添いや思いやり、自分自身に心のゆとりを持つなど、自分たちにできることの積み重ねが大切だとするメッセージをいただきました。

##### 2) マコトさん（ひきこもりを経験された方）の話

マコトさんは、20代中盤から後半にかけて3年ほど「ひきこもり」をされました。現在はフルタイムで勤務される傍ら地元で「ひきこもり」のイベントを開催したり、家族会や対話の場の手伝いをされたりしています。ご自身はお父さんが亡くなられて、経済的に窮するという場面が外に出る契機となった



分科会（講演）の様子

そうです。また、「ひきこもり」をされている方が地域とのつながりを持つことの重要性を訴求されていました。

### 3) グループディスカッションと発表

5つのグループにわかれて、「自分自身の生活シーンにおいて生きにくさを感じたこと」「『ひきこもり』という言葉がなくなるために明日から自分にできること」に関して活発なディスカッションが行われました。参加者からは、「一人ひとりが『ひきこもり』を等身大の問題として捉え、日常生活の中で自分たちにできることを考えることができた。明日から思いやりを持って行動していきたい」とする発言がありました。



分科会（グループワーク）の様子

## 2. 成果と課題

### 1) 成果

「ひきこもり」は当事者の個人的な問題ではなく、多様性を認める、受け入れる社会の必要性を認識する契機となりました。「ひきこもり」という言葉がなくなる社会を実現するためには、「相手に寄り添った気持ちを持つ」「自分自身も心のゆとりを持つ」など、ひとり一人の心掛けの積み重ねが大きな力となることを参加者全員で共有することができました。また、それぞれが一步を踏み出す契機となりました。

### 2) 課題

「ひきこもり」という言葉がなくなる社会を目指して、今後もより多くの方の理解と行動につがる場を作っていくことが求められています。

## 参加者の声（アンケート結果などから）

- ・「自己責任論」が強い社会、「助けてほしい」と言えない雰囲気はとても気になるフレーズでした。
- ・声を挙げられない人を救い上げる重要性、社会がどのようなことをしていかなければいけないのかを考え続けなければいけないと思いました。学校の役員をやっているので道徳地区公開講座などに提案して、保護者や生徒に知る機会を提案していきたいです
- ・ひきこもりの現状について具体的に知らなかったのが、とても勉強になった。認めてもらうことが大切なのは私もとても共感できた。

## 企画・運営

橘 義明（中央労働金庫）【主担当・報告書】

紺野 功（NPO 法人エンリッチ）

# 10 家族ってなんなんだ!? ～映画『沈没家族』から家族のカタチを考える～

## 開催目的

近年、社会の変化に伴い、家族の形態は大きく変化しているといわれています。しかし、家族について考える機会はほとんどありません。家族の在り方や取り巻く環境はさまざまであることを知ったり、自分の家族観を見つめ直したりすることはきっと誰しもにとって意味があるはずです。

本分科会では、自分の家族観について考えてみたい人、子育てしている人、家族支援、子育て支援をしている人、居場所づくりに関心がある人を対象に、映画の観賞を通じて「家族」について、そして家族を取り巻く環境について考えることを目的に開催しました。

## 開催日時

2月8日（土） 10:00～12:30

## 参加者数

34名（参加者28名、出演者2名、スタッフ4名）

## 出演者

加納 土さん（『沈没家族』監督）  
栗澤 稚富美さん（子育てカフェモグモグ）

## 内容・成果・課題

### ◎内容

- 10:00 挨拶・趣旨説明（村瀬）
- 10:05 出演者紹介
- 10:10 付箋の説明 上映後に質問・感想を記入
- 10:15 映画上映
- 11:45 付箋記入／グループで感想共有
- 12:00 付箋をもとに、質疑応答
- 12:30 アンケート記入・回収、終了



### ◎映画上映『沈没家族』（2018年 93分）

1990年代半ばに共同保育で幼少期を送った加納土監督が、自身の生まれ育った場所での生活を振り返るドキュメンタリー。加納土の母親はシングルマザーのため、自分が家にいない間、幼い息子を代わりに保育してくれる人を募集し、彼女が撒いたピラを見て集まった大人たちによって共同保育がスタートする。子どもたちの面倒を見ながら共同生活を送る保育人たち。この取り組みは「沈没家族」と名づけられた。大学生になった加納土は、自身が育った「沈没家族」、そして家族とは何なのかとの思いから、かつて一緒に生活した人たちをたどる。母の思い、そして不在だった父の姿を追いかける中で、家族の形を見つめなおしていく。加納監督が武蔵大学在学中の卒業制作として発表したドキュメンタリー映画を劇場版として再編集等を施して公開された作品です。

## ◎感想共有、質疑応答

上映後、4～5人のグループをつくり、自己紹介と感想の共有を行いました。また、付箋に質問や感想を記入してもらい、全体で共有しました。なぜ映画を撮影しようと思ったのかという作品への思いに関する質問、沈没家族で暮らしたことによる影響などの監督自身の経験に関する質問、沈没家族という共同体の成り立ちやその中身に関する質問などが出ました。



## ◎成果と課題

映画上映後、グループで活発な意見交換が行われました。会場には幅広い年齢層の参加者が集まっていたため、世代を超えてそれぞれの感想を共有することができました。自分と異なる他者の視点が入ることでより深く広く振り返る機会となりました。また、質疑応答では、ドキュメンタリーの当事者かつ制作者本人から思いや背景についての話を直接聞くことで、多様な他者が共に生き、育ってきた時間や空間をリアルに感じることができました。監督が沈没家族に集まった人たちが困っているシングルマザーを助けにきた点ではないところが良かったと話していたのが印象的でした。

課題としては、グループで積極的な意見交換がなされていたことから、参加者が自分の意見を伝えたり表現したりする時間を十分確保することの必要性を感じました。また「家族とは何か」という正解のない問いをたてていたため、感想共有→質疑応答の後にもう一度振り返る時間を設けるなど、イベント後にも考え続けるヒントを十分得られるプログラムづくりが必要だと思いました。

## 参加者の声（アンケート結果などから）

- ・「これが当たり前」と思い込んでいた「家族像」が大きく揺さぶられました。「家族ってなんだろう」の答えはまだわからないけれど、狭い観念でこり固まっていた自分に気づかされ、少しゆるく広くなっていきそうです。人との関わりにもいかしていきたいです。
- ・よくある家族観にとらわれず、“ひとりの人”として共に生きていける家族の関係性を持ってこれから生きていきたいなと励まされました。
- ・出演者たちに一人ひとりもう少し掘り下げて聞いてみたかったです。語られる部分的な言葉には考えさせられることが多くありました。参加者同士のワークでは、他の方が意外と冷静にとらえながら観ていて、面白かったです。

## 企画・運営

村瀬 つむぎ（NPO法人グッド）【主担当・報告書】  
成田 早紀（荒川区社会福祉協議会 荒川ボランティアセンター）  
森本 美花（NPO 法人日本ゲートキーパー協会 TOKYO）

# 1 1 災害時の子どもや家庭を支えるために 私たちができること

## 開催目的

災害は、私たちの日常を容赦なく襲います。なんとかバランスをとっていた生活をたちまち崩します。私たちは、災害発生後に起こる子どもや周囲の人の心の動きを本当に理解しているでしょうか。なんとなく、子どもの支援が必要なのはわかりますが、よくわからないのが本当のところかもしれません。

プレーパーク作りを通して、子どもや周囲の人々と関わってきた講師のお話を通して、子どもや周囲の人も心の動きやサイン、どのように関わればよいのか。プレーパークづくりからフリースクールの運営をするようになった経緯なども伺いながら、私たちが災害時にできることを話し合うことで、参加者一人一人ができることの引き出しを増やすことを目的としました。

## 開催日時

2月8日（土）14:00～16:30

## 参加者数

23名（参加者18名、出演者1名、スタッフ3名、ボランティア1名）

## 出演者

田中 雅子さん（NPO 法人こども∞（むげん）感ぱにー 代表 / 宮城県石巻市で唯一の常設のプレーパーク「黄金浜ちびっこあそび場」の運営や子育てサポート事業、フリースクール事業を行っています。）

## 内容・成果・課題

### 1 講師の田中さんのお話

#### 1) 自分は何ができるのだろうか？ — 埼玉のアーティストとともに子どもの遊び場をつくる —

東日本大震災の緊急災害ボランティアとして宮城県石巻市で活動をする中、平成23年4月、現地の漁師から「お先真っ暗だ。海もダメ、家も流され、船も流され、家族も失う。そんな中でも一点の光でもあればいいのだけれど」と聞き、あまりにも大きな被害を受ける人々に、何もできない自分の無力さを感じる日々でした。その時に、埼玉のアーティストと、子どもの遊び場を作るという企画を一緒行いました。子どもたちのアンケートから、映画館を作ることになり、段ボールを使って映画館を作り始めます。すると、それまで、避難所生活や配給物資等について毎日のように愚痴をこぼしていた地域の方々が、椅子を出して、子どもたちが映画館を作る様子を微笑みながら見守り始めました。「なんか子どもの力はすごいかも」と感じた瞬間でした。

#### 2) 集会所での子どもたちや大人の様子 — 大人は生活再建で精いっぱい —

物資の配給や炊き出しが行われていた集会所では、子どもたちは、部屋の端っこで物資に囲まれながら日々過ごしていました。大人たちは、自らの生活再建に精いっぱい、子どものために何かをしようという余裕はありませんでした。

#### 3) 子どもたちが安全で走り回れる場所をつくる — 子どもも大人も当事者になる公園 —

自分たちで遊びをつくり、地域のみinnで整備をし、ルールを決めながら場をつくと子どもも大人も関わる全てが当事者になります。そういう場が、今だからこそ必要だと思いました。活動を継続する中で、だんだん未就学児の親子が来所し、高齢者が小屋作りや花壇づくりなど、自分ができることを始め、様々な人が集まる場所になりました。子どもの遊び場づくりで始めた活動が、プレーパークを通じて地域の人たちがつながる「地域の拠点」へと変化していました。

#### 4) 障害がある子どももプレーパークで遊ぶ

障害がある子どもと母親がプレーパークにやってきました。その子は、プレーパークをすごい勢いで走り回り、丸太でオブジェを作りました。母親は、ここに来てよかったと話しました。本人のストレスが溜まり、家の中で暴れ、テレビを壊すなどボロボロだったそうです。プレーパークは、障害がある子や不登校の子など、様々な子どもが行ける場所になっています。



## 2 質疑応答

1) 外部からの人や物やお金の支援を受け入れる時の判断基準を教えてください。

物資は、みんなで使えるものは頂きます。しかし、子どもに配るものは断ります。物をもらえる場所になると、みんなで作る場所から、大人から与えられる場所になってしまうからです。

ボランティアは、最低1か月以上いる人のみとしていました(現在は短期も可)。単発のボランティアの場合、子どもたちに毎週辛い別れがくるからです。お金は、いつでもありがたく頂戴します。

2) プレーパークで、スタッフが関わる最低限のルールはありますか。

命と大けがにつながることは止めさせます。「リスク」と「ハザード」について意識しています。子ども自身がけがを予想できるものは「リスク」で、基本的に私たちは見守ります。一方、遊具から釘が出ている、床が抜けて転落するといった、子どもが予想できないものは「ハザード」で、大人たちの責任で徹底的に確認します。例えば、子どもが50cmの丸太の上を歩こうとしています。私たちは、落ちた時のハザードを想定し、丸太の周りに釘やガラスやなどがないか確認した上で、その子の状況を踏まえ、挑戦を大切に、見守りに徹します。

3) プレーパークでの子どもたちのメンタル面について教えてください。

津波ごっこや物を壊すなどはたくさんあり、行為自体は受け入れ見守りました。震災時のつらい体験については、子どもが話し始めたらとことん聞き、それ以外はこちらから聞かないようにしました。PTSD(心的外傷)を持つ子どもは、ボランティア団体のネットワークを通じて専門家や行政の専門機関につなぐこともありました。

4) 不登校などの子どもたちは、初めに来た時と現在でどのように変わりましたか。

受け入れてくれる人がいること、自分を認めてくれる人がいること、困ったときに戻れる場所があるという、「心の保険」が必要です。プレーパークが自分にとって安心できる場所だと分かった時、子どもは次のアクションを開始します。それが学校への復学や進学、社会に出ていくことです。

石巻市の不登校数は247名です。フリースクールや適応指導教室に登録している子どもは50人程度。もっと子どもの居場所の選択肢を広げていきたいと思いフリースクールを運営しています。

## 3 グループワーク

「子どもの居場所を作ることを通して、地域の家庭や大人、高齢者まで生き生き過ごす居場所を作ります。自由に使える広場や部屋があったときに、何ができるか考えてください。」という題で、グループに分かれ、意見交換等を行いました。結果、多世代交流ができる場所を意識した意見が多くでました。「誰でもハウス」「みんなの村」という大きな設定で、河原で大合唱する場づくりや、子どもだけでなく、高齢者も一緒にできること。高齢者が教えるだけでなく、若者が教えるしかけなど相互の視点があるとよいという意見がありました。



## 4 まとめ

子どもは、社会に向けて自分から意見を発することができないので、子どもが子どもらしくあるために、大人が動く必要があります。しかし、現地の大人は生活再建で精いっぱいです。他地域からきたボランティアしかその役割を果たせません。子どもの居場所をつくり、子どもだけでなく多世代の人が当事者となるような仕掛けをつくることで、地域の中で欠くことのできない居場所が誕生していきます。

### 参加者の声(アンケート結果などから)

- ・子どもの遊びを途中で止めていることが多いなと反省させられました。日々の現場で、自分自身で考えている子ども多いと実感もしているので、「リスクとハザード」を考えたいと思いました。
- ・グループワークで大学生からの話がとてもヒントになりました。参加してよかった。
- ・災害という精神的に辛い時期、子どもへという視点が見失われる中で、それを考えさせてくれた。
- ・災害時の子どものメンタルサポートについてもう少し話が聞きたかったです。田中さんの話はとても興味深く聞かせていただきました。

### 企画・運営

藤田 豊(東京都立新宿山吹高等学校)【主担当・報告書】

神保 彩乃(首都大学東京 4年)

森 玲子(東京ボランティア・市民活動センター)

## 12 豊かな地域をつくるのは私たち！

### ～「地域包括ケアシステム」から

### 制度・セクター・分野を超えて～

#### 開催目的

誰もが安心して暮らすために、困っている人を支える仕組みが必要です。現在国は「地域包括ケアシステム」で高齢者介護サービスをつなぐため、介護保険などの改正や再編をしていますが、高齢者だけではない、地域みんなが豊かに暮らすには、どうしたらよいでしょうか。各地域の状況や考え方、市民の想いや取組みを活かした地域づくりをすすめるために、明日からできることを一緒に考えました。

#### 開催日時

2月8日（土）14:00～16:30

#### 参加者数

31名（参加者24名、出演者4名、スタッフ3名）

#### 出演者

平野 覚治さん（一般社団法人全国食支援活動協力会 専務理事）

井上 温子さん（NPO 法人ドリームタウン 代表理事）

油井 和徳さん（NPO 法人山友会 副代表）

安藤 雄太さん（東京ボランティア・市民活動センター  
アドバイザー）



#### 内容・成果・課題

##### 【内容】

ゲストの平野さん、井上さん、油井さんからの事例報告と課題提起を基に、安藤さんの質疑と進行で実施。また、ゲストのお話の後には参加者でグループ討議もあり以下のような意見が交わされました。

- ・（平野さん＝高齢者も子どもも、食べることを通して支え合い交流する幅広い活動をつないでいる）  
全国の子ども食堂の調査では、全国の9割がどこからも支援を受けていないことが分かった。続けるためには活動者を孤立させないことが必要。そのためには横につながっていかねばならない。また、約5割は高齢者も利用者として参加している。いっぽう高齢者のサロンのうち2割は子どもも参加している。現場ではすでに多世代交流が始まっている。食の問題は一番最後に回されてきた。みんなで食べることの意義や価値の分かる人で解決していくことが大事なのではないか。そのためにネットワークが重要だということを教えてくれた。
- ・（井上さん＝団地において高齢者・乳幼児親子・小中学生やホームレスなどの居場所づくりを推進）  
お年寄りが地域の子ども達にご飯をつくるということが生きがいや介護予防にもなっているのではないか。重症心身障害児で医療的ケアが必要な人や若年性認知症の人、ホームレスの人などがコミュニティスペースに来ていて、色々な人と話をする中で共感者が増えて家族のようになりマイノリティじゃなくなるのではと思う。双方向の支援関係は行政ではやりにくいところではないか。市民がつくってきた仕組みは、お互いにカバーし合うということだろう。コミュニティスペース連絡会をつくっていて、複数団体で制度に対してはたらきかけたり企業から支援を受けるときもまとめて支援を求めた方が受けやすいこともあり、小さな団体同士がつながっていくことの必要性を感じる。
- ・（油井さん＝路上生活者の孤立を防ぐため地域と交流をすすめ、地域で孤立する高齢者への支援も）  
路上生活者の支援から始まったが、地域の中にも高齢者のひとり暮らしで孤立しがちな人がいて、区と協働してアウトリーチしたり、自分たちの事務所に来てもらって他の人と関係づくりをしたり、その人が抱える生活課題に対してアプローチして解決に向けていく取り組みに、他のNPOや医療機関、介護事業者、地域包括支援センターなどにも参加してもらいネットワークづくりをしてきた。最近で

は、情報交換だけではなく、そこで起きている地域課題をみんなで考えようということで、テーマを設けて行政の担当者に話をしてもらったり、自分たちに何ができるかということと一緒に考える機会をつくっている。地域包括ケアをすすめるには、医療や介護の専門サービスをつなぐということだけではなく、地域で取組まなければならない課題やできごとのために様々な人や団体が関わって解決していくこと重要だということがわかった。このような関わりがネットワークとなって生きるためには努力していかなければつれない。地域に人や団体の資源がたくさんあってもつながるには心理的なハードルもあり、ハードルを低くして連携しやすい関係をつくっていくことが大事ではない

#### 【成果（まとめ）】

「地域包括」とは一体何なのか。行政からの期待があり、地域でお互いに支え合ってほしいということと仕組みをつくるのだが、高齢者を支えるのは専門家だけではない。地域に暮らしている色んな人たちが関わり合っていく中でお互いにとってプラスになり、コミュニケーションをとれるようにするために組んでいくネットワークこそが私たちの考える「地域包括」ではないか。そのためにもう一度地域をどう見直していくのか。私たちの生活をどう豊かにしていくのかという意見や声をきちんとくみ上げ、まとめて政策に提言していく知恵や根気強い運動性が必要になる。それぞれの地域で、制度・セクター・分野を超えてつくり上げていかなければならないのではないかと。そうして「新しい地域包括ケア」を私たちの手をつくっていくことができれば、分科会で話し合ってきた意味があるのではないかと。

というまとめとともに、参加者それぞれの地域での活動に期待し合い、励まし合い、共有し合う「ネットワーク」を今後もつくっていく必要があることを確認しました。

#### 【課題】

分科会での議論の中で、今後地域でネットワークをつくり、協働して活動をすすめていく上で課題として考えなければならない点として3点挙がりました。

- 1) 団体の活動においても、ネットワークでも、財源をどうするか。公的財源が得られても続くとは限らない。公的財源だけに頼らない動きをどうつくるのか。
- 2) 個人情報共有のハードル。ネットワークや協働関係をつくる中でも人に関する情報を得ることが難しい。時間をかけてお互いの信頼を積み上げていってこそ共有し合える関係に、という報告も。
- 3) 自治会・町会との関係。地域の中で課題に近い情報を持っているのは自治会・町会などの地域組織ではないか。しかし組織率や高齢化など年々厳しい状況もある。お互いに自組織の特性や他団体とつながれる許容性をもっているかあらためて見直しながらネットワークを広げたり新しい関係をつくっていく必要があるのではないかとという意見も。

### 参加者の声（アンケート結果などから）

- ・ つながり、ネットワークというものは様々なイメージを想起するものですが、ボランティア活動では緩やかな…という枕言葉が継続性のキモになるのではと思いました。
- ・ 思っていた地域包括ケアとは異なっていたが、地域にいる方々が安心してらせる居場所づくりを行うことが地域をまとめてケアするシステムとなっているのだと思いました。
- ・ どう財源を作っていくかというのがやはり大事なことが再確認出来ました。地域包括ケアが住民にわかりやすいものになることが必要だと思いました。

### 企画・運営

鹿住 貴之（認定NPO法人JUON（樹恩）NETWORK）

神元 幸津江（NPO法人全国災害ボランティア支援団体ネットワーク（JVOAD））

紺野 功（NPO法人エンリッチ）

熊谷 紀良（東京ボランティア・市民活動センター）【主担当・報告書】



# 13 「ボランティアのトリセツ」～ボランティアあるある編～

## 開催目的

ボランティア活動を長年していく中で、旧態然の体制が続いたり本業とは異なる業務の進め方に困惑したり、誰にも相談出来ずうやむやな気持ちで続けている方が結構いるのではないかと思います。その悩みや不満、不安が少しでも解消される様に、藻谷浩介さんの進行でご意見番3人の方々からアドバイスやヒントを話して頂きます。

## 開催日時

2月8日(土) 14:00～16:30

## 参加者数

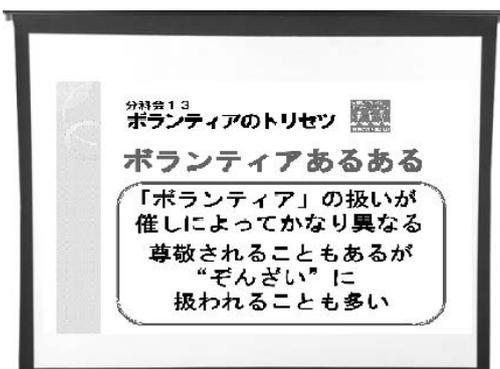
42名(参加者33名、出演者4名、スタッフ5名)

## 出演者

進行 藻谷 浩介さん(日本総合研究所 調査部主席研究員)  
登壇者(ご意見番) 枝見 太朗さん(富士福祉事業団理事長)  
竹内 哲哉さん(日本放送協会 解説委員 パラリンピック、福祉担当)  
筋 清 さん(資生堂ジャパン株式会社)

## 内容・成果・課題

ベストセラーになった「妻のトリセツ」をヒントに、日常生活でボランティア活動をしている方にとって、様々な不安や問題点、疑問点を出し合って、ご意見番の方々にアドバイスやヒントが伺える様な場づくりを考え、参加者から開催前にアンケートを取って意見や質問を集めるスタイルにしました。アンケートの項目では、①自分の中の優先順位 ②ボランティア活動ってなんでしょか? ③あなたにとってボランティアとは、等も併せて伺いました。①の優先順位は、仕事(1位)勉強(2位)趣味(3位)で、ボランティアは、項目で挙げた中で一番下の4位となっていました。②に関しては、自主的な活動であると定義付けされている人も多い中「ボランティア」について絶えず疑問を感じているカキコミも見受けられるなど、皆さんの生の声を随時プロジェクターで紹介しながら(写真左の様な感じ)進行しました。



参加者の意見をスクリーンに投影



登壇者は、父親が福祉の仕事をしていたのでボランティアが身近な存在だったという枝見太朗さん、定年間近までボランティアのボの字も知らなかったが、現在ではスーパーボランティアとして活躍し、全く違う世界も楽しんでいる筋清さん。放送ディレクターとして福祉番組やパラリンピック中継を担当、ご自身も車椅子のユーザーという立場からみると、当事者こそ自分の置かれている状況をもっと発信する必要があるのではないかと感じることもある竹内哲哉さん。そして、ボランティア活動には無縁です

がと云われながらも、東日本大震災以降に東北への支援を永年続けていらっしゃる進行役の藻谷浩介さんには、聴き役に徹して頂きました。

「ボランティアあるある」では、アンケートで挙がった行政や自治会、所属する組織などに対する問題意識を幾つか紹介しました。その発題を受けて各登壇者から各地の現状や、対策になるヒントなどを多角的に話していただきました。海外ではボランティアが自分の意思で自由に出来るのに対して、日本ではお膳立てされた義務的な活動になっているケースがみられる。ボランティアに入るのは勇気がいる状況が生まれていることも語られました。続けて、東京オリンピック・パラリンピックのボランティアに関しての現状確認を行いました。登壇者や参加者にも深く関わりのある方がいらしたことで、進捗状況の報告、今見えている課題、今後何をすべきかなどを話されました。

そして、後半は「ボランティアに関する問題点」で展開しました。まず、ボランティアに謝礼はいるべきか議論がされました。ボランティアは自発的なものなので有形無形の対価を求めるべきではないというアドバイスがありました。現在曖昧になり克ちな、何故ボランティア活動をするのか？と云うボランティアの本質に迫る有意義な意見交換にもなりました。

また、災害復興支援活動の募集で現地に行くと、初めての現場で状況も分からないにも拘わらず、その現場の作業員で即対応出来るかのような対応をされたことで心が折れそうになった事例が参加者から話がありました。それには、ニュースなどで「ボランティアが足りない」報道されたりするので、現地側も若干勘違いも生じているのでは、この点に違和感を覚えた事も有るという意見も続きました。

最後に参加者の皆さんのアンケート集計「あなたにとってボランティアとは」を全員分紹介して終了。成果としては、藻谷さんの鋭い斬り込みで、参加者の想いや疑問を吸い上げて頂き、登壇者の方々からも自由な展開が進み興味深い話し合い出来たのではないかと思います。

その反面、分科会の課題として、テーマが広範囲であったため、大雑把なやりとりで終始していた感も否めません。切実な問題を抱えていて、その解決を希望していた方々にとってはもう少し踏み込んだやりとりを希望していた様にも感じます。ヒントやアドバイスでは無く、解決策が講じられる展開こそ必要だと感じました。

## 参加者の声

---

- ・楽しみながらボランティアを行う、大賛成ですこれから人生の糧としていきたいと思えます
- ・ボランティア活動の中で迷いが生じることがありましたが、活動の目的を明確に自分の中で確立出来ました。
- ・様々な活動者から現状を聞いたことあるあるを共有できたことも良かった

## 企画・運営

---

鈴木 正昭（りすこ（おおた復興支援活動連絡協議会））【主担当・報告書】

犬塚 尚樹（NPO 法人ふれあいの家 おばちゃんち）

小林 理人（青梅市社会福祉協議会 青梅ボランティア・市民活動センター）

斉藤 友歌里（老人給食協会ふきのとう／一般社団法人全国食支援活動協力会）

# 14 映画『ナオトひとりっきり』上映&トークショー ～福島・人と動物、ぼくらはまだここに生きているぞ!～

## 開催目的

2011年の福島第一原発事故から9年、私たちは様々なニュースを目にしてきました。

しかし、当時、無人地帯と化した町に残り、置き去りにされた動物達の世話をしながら暮らす一人の男性がいたことは殆ど知られていません。その様子を追ったドキュメンタリー映画を鑑賞し、本作監督の中村さんと主演の松村さんから当時と今のお話をお伺いし、改めて震災について知り、私たちにできることを考えることを目的としました。

## 開催日時

2月8日(土) 14:00～16:30

## 参加者数

30名(参加者23名、出演者2名、スタッフ5名)

## 出演者

中村 真夕さん(映画監督/ジャーナリスト/『ナオトひとりっきり』監督)  
<プロフィール> コロンビア大学大学院を卒業後、ニューヨーク大学大学院映画科で映画を学ぶ。監督作品に高良健吾映画デビュー作『ハリヨの夏』、11年『孤独なツバメたち～デカセギの子どもに生まれて～』等。今回の上映作品『ナオトひとりっきり』は15年に全国劇場で公開、モントリオール映画祭ドキュメンタリー映画部門に招待されている。



松村 直登さん(『ナオトひとりっきり』主演)

<プロフィール> 1959年、福島県双葉郡富岡町に生まれる。高校卒業後建築業務に従事。震災と原発事故で両親と共に避難しようとしたが、親戚宅、避難所もいっぱいである両親と兄を避難させ、自分は自宅に残ることを選択。以後、同じく取り残された動物たちと富岡町で暮らしている。

## 内容・成果・課題

分科会は2部構成で行いました。2011年の震災後の福島県富岡町に暮らす一人の男性を追ったドキュメンタリー映画の視聴と、映画を製作された中村監督と主演の松村さんをお招きして、当時の様子や、これまでの経緯、現状、これからのことを伺い、参加者から質問をぶつけ、感じたことを共有しました。

まずは、ドキュメンタリー映画『ナオトひとりっきり Alone In Fukushima』の上映です。2011年の震災時に事故の起った福島第一原発事故から12キロの距離にある富岡町。原発事故による全村避難で無人地帯になったその町に、目に見えない放射能のリスクの中、町に残されたいきものたちと一緒に暮らす姿を1年近く見つめ続けたドキュメンタリーです。海外メディアでは多く取り上げられたナオトさんですが、日本メディアで取り上げたのは本作のみです。福島 of 全村避難が指示された町で、人が生活していたことは殆ど知られておらず、その事実には驚きを持ってご覧頂けたのではないかと思います。ありのままを撮影した作品に「変に作り手の想いを盛り込まず、脚色のほとんどないシンプルな映画が逆に心にしみました」といった、作品そのものに対する好意的な感想も頂きました。

後半は、本作監督の中村真夕さん、主演の松村直登さんにお越し頂き、作品の生まれた経緯や撮影について、また、映画では描かれていない日常や、有識者とのやり取りなど、ご本人たちにしか聞くことの

できないお話を伺いました。「どの日本のメディアもTV局も、企画に賛同してくれなかったので、ひとりでカメラを担いで行きました」という中村監督。自由に報道できない現状に疑問ともどかしさを感じたと言います。一方、除染のやり方や実情を話して下さった松村さん。山から雨水で土の中にしみ込んだ放射線はどうなるのか。避難解除になっても戻らない町民、住民票は富岡町にあっても実際には居住していない方々など「本当の復興とは何か」など、考えさせられることがたくさんありました。

また、参加者からは「復興について松村さんは何が必要だと思いますか?」という質問がありました。「若者が増えること。でも、難しいのでは」との回答。「お米の生産で活性化などの案はどうか?」といった活発な意見交換も見られたが、もともと米作りに向かない土地であるなど、離れて暮らす私たちでは気がつけぬ視点も学ぶことができました。しかし、村松さんの表情にはあきらめや絶望があるわけではなく、にこやかに震災前から現在、未来に向けて、見届けるという覚悟を感じました。このように、参加者と出演者が率直な意見交換ができたこと、それを一生懸命聞いて下さった皆さんをみて、実際に見て、聞くことの大切さを実感しました。なかには、自分たちでも上映会をやりたいと声を掛けて下さった参加者もいて、これをきっかけに自分たちにできることを一歩踏み出していただければと思います。

分科会後のイロドリカフェにも、お互いの感想を交換したいと参加者の方々が参加して下さったことも嬉しく思いました。



## 参加者の声（アンケート結果などから）

- ・記憶が薄れてくるころに大切な映画でした。
- ・ナオトさんご本人に来ていただいて、生の声を聴かせていただいて感謝です。本当の事実を知らないことを恥ずかしく思いました。
- ・トークを聞いて何でも自分の目で見て、耳で聞く事が大事だと思いました。

## 企画・運営

森本 美花（NPO 法人日本ゲートキーパー協会 TOKYO）【主担当・報告書】

成田 早紀（荒川区社会福祉協議会荒川ボランティアセンター）

村瀬 つむぎ（NPO 法人グッド）

# 15 急増する孤独死は人ごとではない！！ ～年間3万人その現状とは～

## 開催目的

年間3万人を超え、今や単身者の誰にも起こる可能性のある孤独死ですが、多くの方々にはよく知られていません。そこで、実際の現場に密着して孤独死についての本を執筆された菅野久美子さんを招きその実態と原因について紹介します。また、対応や対策について行政や民間の取り組み事例を紹介し、参加者に個人や地域・団体などでできることや行政がすべきことなど、これ以上孤独死を増やさないためにどうすれば良いかを考え、議論して頂きます。

## 開催日時

2月8日（土）14:00～16:30

## 参加者数

44名（参加者35名、出演者5名、スタッフ4名）

## 出演者

菅野 久美子さん（ノンフィクションライター）  
篠崎 猛さん（一般社団法人日本安否確認士協会 代表理事）  
清野 比登美さん（一般社団法人日本安否確認士協会 代表理事）  
井上 博さん（江東区社会福祉協議会 係長）  
紺野 功（NPO 法人エンリッチ 代表理事）

## 内容



### <孤独死についての紹介>

ノンフィクションライターの菅野 久美子さんより孤独死の定義・増加数の推移から現場密着取材から見た原因（ひきこもり→セルフネグレクト→孤独死）について実例紹介されました。

### <対応や対策事例の紹介>

日本安否確認士協会の篠崎さんより不動産業の経験からたくさんの孤独死に遭遇し、その対策として見守りを長年実施。その見守りの経験から安否確認のプロを養成すべく協会を設立し孤独死の対策に取り組んでいます。

NPO 法人エンリッチの私、紺野は、実弟の孤独死を経験したことにより NPO 法人を設立し、誰でも手軽に利用できるよう現役世代に向けた LINE を使った見守りサービスを開始。1年2ヶ月で900名以上が利用し20歳から90歳までが利用中で行政との連携に向けて活動中です。

江東区社協の井上さんは、高齢者見守り支援事業として地域で孤立させないために繋がりを作るためのサロンなどの居場所作りを行っています。しかし、個人情報保護法の改正に伴い活動が縮小傾向にあるそうです。

取り組み事例に対する質疑応答を行い、ワークショップを実施。グループ内でそれぞれが感じたことを通じて対応や対策について複数の視点で議論を行い発表して頂きました。

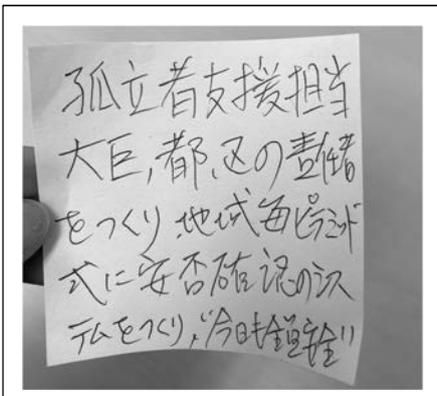
## 成果

参加者の大半は、言葉としての「孤独死」は知っていても高齢者だけの問題ではないことやひきこもりやセルフネグレクトが孤独死と関連が深いという背景については認識がなく、分科会を通じて理解を深めることができました。

個人でできること、地域でできること、組織や集団でできること、行政でできることと4つの視点から孤独死の問題をどうしたら良いかの議論をグループで行い発表してもらいました。



## 課題



時間的な問題もありますが、今回表面的な話しかできず孤独死された方の人生や生きづらさなど、今の社会構造や人間関係に起因している原因まで踏み込んだ話をご紹介することができませんでした。

現実の数字や状況に留まらず、その原因となる社会的な背景と文化や時代の変化に伴う日本人の学校教育制度から人との関わり方まで根深いものが裏側にあるということ掘り下げて知ることが重要なのかも知れません。

## 参加者の声（アンケート結果などから）

- 行政以外の取り組みで、初めてしることがあり参考になった。
- 早期発見に視点を充てることも大切だと感じた。良い取り組みを積極的に取り組む行政であってほしいと思う。
- 支援する側が支援を受ける側の「本当の叫び」を受け入れ、それを通じて世間社会の賛同と理解をどれだけ得られるかが、今回の分科会も含め関係する市民活動の力が問われます。その本格的スタートの年にしてほしい。
- 現在の地上波では、決して放映することが出来ないような画像を含め、実態を知れたことは何よりでした。深刻な内容ながら、前向きに終わられたことを嬉しく思います。
- 孤独死が高齢者に限らないという事が大変勉強になった。町会、地域活動などに情報共有できればと思う。
- こういう分科会をセッティングしていただいたことが大事だと思う。
- 「孤独死」について色々な立場の方からお話を伺うことで、改めてこの問題を考える事が出来た。
- 孤独死が、実は身近にあることに驚くとともに、取り組みをしないともっと増えることにも危機感を感じた。ディスカッションも色々な話がでてとても勉強になった。

## 企画・運営

紺野 功（NPO 法人エンリッチ）【主担当・報告書】

橘 義明（中央労働金庫）

上田 英司（特定非営利活動法人日本 NPO センター）

# 16 交流企画 話そうカフェ イロドリ IRODORI

## 開催目的

分科会の時間だけでは話しきれない！もっと参加者同士で話したい！そんな参加者の皆さんや出演者、実行委員などが、飲みながら食べながら、自由に語り合える場です。分科会参加者の皆さんの活動をPRすることができます。配布物のある方は是非ご持参ください。追加の参加費はかかりません（一部の飲み物は有料）。

## 開催日時

2月8日（土）17:00～18:30

## 内容・成果・課題

「話そうカフェ IRODORI」は昨年に続き2回目の開催で、前回と同様のスタイルで実施しました。全体で乾杯をする交流会とは違い、参加者が三々五々集まって、参加者同士や出演者と分科会の続きの話をしたり、初めての方と出会うと語り合ったりする自由な場です。

参加者の方には名札をつけていただき、分科会の出演者の方には、出演者と分かるようにTVACのオリジナルせんべい「ぼらせん」で作成したメダルを下げてくださいました。



また、「作ってみよう・体験してみよう」コーナーとして、災害時に役立つサラダ油ランプ作り体験（協力：VCAS）、手話体験（協力：実行委員・石橋茜さん）を設置。

サラダ油ランプ体験では、災害時の話を織り交ぜながら多くの方に、作り方を覚えていただくことができました。手話体験でも、手話を習ったり、手話で会話したり、多くの方に楽しんでいただきました。



なお、今回から参加者の方が活動をPRできることとし、広報の段階でも告知しています。チラシなどの配布もできると事前に呼びかけましたが、ほとんどありませんでした。事前や当日の周知も十分ではなかったのかもしれませんが。

そこで、参加者の方にマイクを回し、活動紹介や参加した感想などを話していただきました。



飲み物、食べ物については、ワイン（協賛：ペルノ・リカル・ジャパン株式会社）、ソフトドリンク、お菓子（協賛：株式会社ガイア、モンデリーズ・ジャパン株式会社）は無料で、また、ビールは有料で提供しています。



最後は高橋実行委員長の挨拶で締め、集合写真を撮影して、閉店となりました。



## 企画・運営

- 芦澤 弘子（聖学院大学ボランティア活動支援センター）  
犬塚 尚樹（NPO 法人ふれあいの家 おばちゃんち）  
鹿住 貴之（認定 NPO 法人 JUON（樹恩）NETWORK）【報告書】  
紺野 功（NPO 法人エンリッチ）  
橘 義明（中央労働金庫）  
成田 早紀（荒川区社会福祉協議会 荒川ボランティアセンター）  
水田 征吾（調布市市民活動センター 運営委員）  
牧野 斉子（NPO 法人ワーカーズコープ）

# 17 イマドキの若者徹底解剖！

## 開催目的

---

次世代を担う若者にボランティアや地域活動に参加してほしいと願う団体や人が多くいる一方で、ボランティアの現場に若者が少なく、どうしたら参加を促すことができるのかという悩みをきくことも多くあります。そんななか、ボランティア活動に関心はあるが参加しない若者（20代）の6割は活動に充てる時間がないことを理由にしています。（31年3月 都民等のボランティア活動等に関する実態調査より）

現代の若者がボランティア活動や地域活動に対する優先順位が下がってしまう理由は、はたして時間がないことだけが理由なののでしょうか。このような疑問から、現代の若者について理解を深めることを通して、ボランティアに関心のある若者が一歩を踏み出し、実際にボランティア活動や地域活動に参加するためにはどのようなアプローチ方法が必要なのかを考えたいと思い、分科会を企画しました。

## 開催日時

---

2月9日（日）10:00～12:30

## 参加者数

---

34名（参加者29名、出演者2名、スタッフ3名）

## 出演者

---

齊藤 ゆかさん（神奈川大学人間科学部 教授）

藤本 耕平さん（TwitterJapan 株式会社 若者研究マーケッター）

## 内容・成果・課題

---

### 【内容】

#### 1. 登壇者よりイマドキの若者について報告

##### 1) 藤本 耕平さん（TwitterJapan 株式会社 若者研究マーケッター）

まず初めに、藤本さんより、『「つくし世代」（20代若者）を動かすための、新しいマーケティング手法』をテーマに1時間ご講演していただきました。藤本さんのお話は、時代背景の変化や流れから、時代による若者の変化、現代の若者の価値観についてお話していただきました。現代の若者には、全てを押し付けるのではなく、自分自身でつくれる余地をつくるスキマづくりが大切であることや、ゆるいつながりを欲しているというお話がありました。そこから、現代の若者にボランティア活動に参加してもらうためには、What=なぜ参加するのではなく、Why=なんのために参加するのかを明確にすることが大切であるというお話がありました。

##### 2) 齊藤 ゆかさん（神奈川大学人間科学部 教授）

齊藤さんより『若者に潜むボランティアをどう引き出すか？～「一歩踏み出せない若者」に活動の楽しさを届けよう～』をテーマにご講演していただきました。齊藤さんのお話では、まず、参加者の皆さんが若者に参加してほしいボランティア内容が若者の囲い込みになっていないかという問いかけがありました。若者が参加しやすくするためには、強制感を出すより簡単に抜けられる、気軽に参加できる単発のボランティアも有効というお話がありました。普段関わっている学生のリアルなお話から、若者を分析していただき、活動後の振り返りの時間を設けることが大切。少し声をかけるだけでも声をかけてもらった学生にとってはまた来たいと思うきっかけになることもあるというお話がありました。

##### 3) 参加者同士で内容を共有、質疑応答

講師の話を受けて、参加者同士で内容を共有する時間を設けました。その後、講師への質疑応答の時間を設けました。参加者の皆さんは、日ごろ活動の中で感じている疑問について質問される方が多かつ

たです。「学生や若い人を活動に継続してきてもらうために意識したらよいこと」という質問には、「継続してもらうためにはまずは楽しいと思ってもらうことが大切。教育的要素があるとより参加者が増える傾向がある。」というお話がありました。

#### 【成果・課題】

マーケティングの視点と普段学生と関わっている大学の教授、お二人からお話を聞くことができたことで、様々な視点から若者と関わっていくコツを学ぶことができました。また、視点や切り口が異なっても「現代の若者は、ボランティア活動をやりたがっている!」という意見など、共通する部分が多く、重要なところは共通するということを知ることができました。

今回は、お二人のお話を聞くことをメインとする分科会を企画しましたが、参加者の方同士が話を共有する時間が短くなってしまったので、参加者同士がもっと話を深められる時間をきちんと確保したいと思いました。



#### 参加者の声（アンケート結果などから）

- ・「つくし世代」の若者の気持ちがわかりやすく分析していただいたのでとても参考になった。声をかけたり後押ししたり支援したりの方法が自分なりに自分の方法で想像できてとても良かった
- ・若者のボランティアへの想いや、考え方が分かり、どう巻き込むかを考える良い機会になりました。私も若者に入るので、自分への理解も深めることができました

#### 企画・運営

成田 早紀（荒川区社会福祉協議会 荒川ボランティアセンター）【主担当・報告書】

直井 友樹（NPO 法人NICE）【主担当】

芦澤 弘子（聖学院大学ボランティア活動支援センター）

## 18 元気の種を探してみませんか？

### 開催目的

アメリカ生まれのメンタルヘルスで注目されている Wrap という手法を活用し、精神障害や疾患のある当事者と他の人たちが交流する企画を開催しました。これにより、当事者周辺の交流だけでなく、一般の方々にも、広く当事者を知ってもらうことを目的としました。

### 開催日時

2月10日（日）10:00～12:30

### 参加者数

30名（参加者18名、出演者6名、スタッフ4名、ボランティア2名）

### 出演者

江上 幸さん（Wrap アドバンスレベルファシリテーター）  
坂井 秀子さん、岡本 あやこさん、長澤 一彦さん、白井 修平さん  
石井 真由美さん、松村 優子さん、鈴木 隆宏さん、黒岩 堅（Wrap ファシリテーター）

### 内容・成果・課題

#### 【内容】

論点・議論の内容として Wrap の 12 個あるテーマのうち、元気になる道具箱という1つのテーマに絞り、参加者、出演者のエピソードをお互いに話しました。参加者と出演者の話が重なる部分もあり、疾患の有無に関係なく同じ人間であることを出演者側が強く感じました。参加者側の方にも偏りなく同じ人間であることは伝わったのではないかと感じています。これらのことはとても嬉しいことでした。

得られた成果としては出演した当事者に自信がついたことと、参加者から高評価をいただいて、私たちが実施していることは一般の方にも通じるということを感じました。

今後の方向性として他団体や実行委員会などと協働を視野に入れ、今回のように参加できるところを探しながら、自分たちの Wrap を学び合うことも継続していきます。



#### 【成果】

出演者(各テーブルのファシリテーター)のコメントとして、「毎年こういうことがしたい」、「初めて偏見を感じずお話ができました」という意見が多数出てきました。また、参加者からの質問として元気の種から WRAP を知りたいという意見が出てきて、興味を持っていただけたと思います。

企画者の分科会への想いとして、一般の人たちと精神疾患などを抱えた当事者たちの交流がしたいというのがありました。いつもは支援者→当事者の支配関係による人間関係しかなく、

今回のような対等の場所は初めてでした。

#### 【課題】

もっと Wrap を伝えていきたいのですが、どこに応募しても、「精神疾患の人にはもっとふさわしい場所があります」などと言われることが多いため、我々が参加できる場所は限られています。

今後も対話のテーブルについてくれるところを探し、広げていきたいと思います。



#### 参加者の声（アンケート結果などから）

---

- WRAP の 6 つのプランとどうつながるか？事例があると分かりやすかったかもしれません。
- 知りたいです！とても楽しかったです。
- 久しぶりにまた原点になりました。
- なかなか WRAP の etc は本格的ではないかなと思いましたが、資格が無くても自分でいくらでもできること。
- まずは好きなことを大切にしていきたいです！！

#### 企画・運営

---

黒岩 堅（東京 Wrap）【主担当・報告書】

高橋 義博（府中市市民活動センタープラッツ）

# 19 想いをカタチに。 助成で広がるボランティア・市民活動の未来

## 開催目的

ボランティア団体の資金調達方法は多様になってきていますが、いざという時にまとまった金額として頼りにしたい1つに「助成金」があります。助成金とは、どのような想いがこもったお金なのか、助成する側は、何を狙っているのか。活動の明るい未来のために、助成団体と一緒に今できることを考えます。今回は、実際の申請時には、どのようなポイントを的確に伝えるべきか、審査員がどのように受け止め、何に疑問を抱くのかを参加者全員で体験することを目的に企画しました。

※参加者有志より、事前課題として申請書を作成・提出していただきました。

## 開催日時

2月9日(日) 10:00~12:30

## 参加者数

32名(参加者21名、出演者7名、ボランティア1名、スタッフ3名)

## 出演者

◎ファシリテーター：安藤 雄太さん(東京ボランティア・市民活動センター アドバイザー)

◎民間助成団体のみなさん：原田 健児さん(社会福祉法人清水基金 事務局長)

松林 宏さん(公益財団法人損保ジャパン日本興亜福祉財団 専務理事)

早川 雅人さん(公益財団法人ヤマト福祉財団 常務理事)

北村 公重さん(公益財団法人キリン福祉財団 事務局長)

有竹 丈司さん(中央労働金庫 総合企画部(CSR)担当部長)

渡辺 裕さん(公益財団法人パブリックリソース財団 プログラムオフィサー)

\*ボランティア・市民活動を応援する財団のみなさんと定期的に集まっている部会(事務局：東京ボランティア・市民活動センター)の会員団体を中心に協力いただきました。

## 内容・成果・課題



### 【助成金の種類と特徴(安藤 雄太さん)】

市民活動を進めていく上では色々な財源があり、それぞれ性格が異なります。その中で「だから今回は助成金が必要だ」と申請するのが良いと思います。委託事業は、基本的に委託元の仕事であるため、用途を自由に決められません。申請書の構造は、①フェイスシート(団体の概要)と②どのような活動をするのか(ものによってはスケジュールや展望を求められるものもある)に分かれているものが多いです。①には必ず、会費・寄付金・補助金・事業所費などという欄がありますが、これをきちんと書くことにより、団体がどのような活動をしていこうとしているのか、してきたのかが見えるので、審査会では重視されます。自団体の、どの財源が一番重要なかということを見極めていただくということがとても大事になってきます。

助成金は、基本的には公募型・非公募型・計画助成など、幾つかのパターンがあり、助成団体の地域性や分野性、目的とすることを意識する必要もあります。書類も皆同じではありません。書類を見て、その財団が何を重視しているかを読み込まなければいけません。書類の中で、団体のミッションや目的、地域の中でのネットワークの有無、それに見合う実効性・実現性・継続性のある「やりたいこと」をアピールする必要があります。

### 【模擬審査会コメント(審査対象：事前に申請書を提出した6団体)】

※助成財団のみなさんからのコメントと進行について：財団を代表してしまうと「ちょっと言えないなあ」ということもあるので、審査会の中で一番厳しい視点をお持ちの方が「言うであろうなあ」を代弁していただくことにします。その後、申請者からの「私としてはこう思ったのです」というご発言と、会場全体からの質問を受けます。これを6団体分を行います。

○申請書中に申請の背景と社会課題のようなものが記載してあると、とても分かりやすい。特に一般に理解が広がっていない分野の活動であるという認識があれば、尚更、その背景記述は重要になる。昨日事務局員になったような人にも分かるような形で書くと良い。但し簡潔明瞭に。全体の分量を考えて、書き過ぎない様に。

○「やってみたらこうだった。だから助成金を使ってもっと大きくしたい」は、審査員を説得できる。○ランニングコストに対する助成申請だと、多くの公募の中では、若干ポイントが下がってしまう可能性がある。一過性のイベント的なものよりは、継続性且つ成果物がある方が欲しがられる傾向はある。日常性のある活動に、どのように先駆性・必要性があると見せるかもポイントである。

○共感者・理解者をどのように広げるかという視点を持つと良い。

○活動の考え方・理念と、申請内容そのものがそぐわないと、説得力に欠けてしまう。限られた書面の中で整合性を持たせる必要がある。まずは申請書を通じて、コミュニケーションを取りたい。

○「手書きであること」を重視する助成団体もある。過去に、助成が確定した団体からの手数料収入を得る「中間支援団体（代筆屋）」がいたことがわかった（現在も存在はしている）。そのような人たちに、財団のお金が少しでも渡るということは絶対にしたくない。

○（例）「一部766円のオリジナルテキスト」は、しっかりした書籍と認識する。その「オリジナル」のバックボーンは何なのか、書籍の中身に関する説明も必要。また、それを使ってどのような活動するのかも重要。もし、一般に広く普及したいから申請するのであれば、リーフレットなども必要になってくるのではないかな。

○審査員の中には、自分の専門分野に近いところを高く評価する（応援したい）方もいるので、審査メンバー（大学教員や民間団体の方など）が公表されているなら、調べてみるのも良い。反対に、見方や評価が厳しくなることもある。

○自主財源をどのように使うのか、どの部分を助成申請するのか、用途と充当金額の関係性も審査のポイントである。

○申請書を提出する前に、申請先にたくさん質問した方が良い。全く対象外である場合はもとより、対象範囲のグレーゾーンであるというケースは多少ある。※締め切り日間際ではなく、余裕を持って！

【成果】休憩なしの約2時間にわたる模擬審査会でしたが、終始緊張感に包まれていたことを、報告書作成にあたり、第一に報告したいと思います。参加者はもとより、助成財団のみなさんの熱い想いが溢れていました。事前課題として送付した、本分科会専用のA4片面の申請書には、「参加者の思い（考え）を書き切ることはできない」を前提にしていましたが、助成団体のみなさんが、それらの申請書に書かれていないことまで推測して審査コメントを述べていたことに、参加者のみなさんもお気づきになられたのではないのでしょうか。ボランティア・市民活動団体も精一杯日々の活動に向き合っておりますが、その想いを受け止める側の誠意を肌で感じる事ができた分科会であったと思います。



## 参加者の声（アンケート結果などから）

- ・助成申請書に添った進行だったので、自分の弱みが見えてきました。
  - ・個別事例と検討が具体的で、詳細の話を聞くことができ、参考になりました。
  - ・助成金の性質だけでなく、助成団体（企業）がこういった観点で審査しているかが分かりました。
  - ・いくつか助成をいただいてきた立場として、何を求められているのか？など、参考になりました。
- それは、申請のみならず報告に活かし、次につなげて行こうと思いました。

## 企画・運営

五十嵐 豪（認定NPO法人難民を助ける会（AAR Japan））

紺野 功（NPO法人エンリッチ）

谷口 陽香（東京ボランティア・市民活動センター）【主担当・報告書】

## 20 ダブルケア（子育て・介護）に備えよう！ ～みんなで支え合う社会をめざして～

### 開催目的

ダブルケアとは、子育てと介護が同時期に発生する状態のことをいいます。晩婚化により出産年齢が高齢化し、親戚のつながりも希薄化し続けている現代、ダブルケア世帯の増加が予測されています。専門家の方々や当事者・経験者にお話を伺い、ダブルケアの現状を学ぶとともに、この期間を社会的にどう支え合えるのかを考えました。

### 開催日時

2月9日（日）10:00～12:30

### 参加者数

19名（参加者14名、出演者2名、スタッフ3名）

### 出演者

相馬 直子さん（横浜国立大学大学院国際社会科学研究所 教授）  
植木 美子さん（一般社団法人ダブルケアサポート 理事）

### 内容・成果・課題

<内容>

#### 1 植木さんの活動紹介

最初は地元の横浜で子育て支援の活動から入りましたが、その活動を通じて自分自身がダブルケアの状態であったことを知り、そうした課題があることを社会に広めたいと考えようになりました。2012年の当事者座談会から始まって、ハンドブックの作成のほか、サポーター養成講座やダブルケアカフェの開催をしています。今では岩手県・香川県・京都府・愛知県・東京都・静岡県など、全国にダブルケア支援の動きが広がっています。



左：相馬さん、右：植木さん（右）

#### 2 相馬さんからの話題提供

ダブルケアは一般的には「子育て」「介護」の同時ケアと捉えられがちですが、実際には「障害」「病気」「労働」など多重ケアの状態を指します。ダブルケアの状態であっても、生活の均衡が保たれていればよいのですが、個々のケアの異なるニーズを同時に満たすようなことが特定の人に集中することで、精神的・経済的に大きな負担感をもたらしています。調査によると、ダブルケアの経験者は人口の約20%、数年先に直面すると見られているのが約15%、数にして推計約25万人とされていますが、これは「子育て」と「介護」のダブルケアに限定したものです。最近では、「孫支援」と「介護」のダブルケア、子ども自身がケアする側に回るヤングケアラーの問題も出てきています。ダブルケアをより困難にしている社会的な要因としては、晩婚化・核家族化・地域関係の希薄化・労働市場の不安定化・縦割りの福祉制度などが挙げられます。個々のダブルケアラーが考える優先順位に沿った柔軟な支援のしくみや社会制度が求められます。



#### 3 グループワーク

参加者が座っているグループごとに、植木さん・相馬さんの話の感想や疑問に思ったことなどをポストイットに書いて出し合ってもらい、グループの中で「気になること」としてまとめてもらいました。

#### 4 全体で意見交換

グループで話し合った「気になること」を発表してもらい、全体での議論の切り口にしました。主な論点は以下の通りです。



- ダブルケアカフェに来てもらうためにはどうしたら？：明確なメリットがないこともあり、残念ながら人を集める特効薬はありません。これまでの経験ではクチコミは有効でした。
- ヤングケアラーのポジティブ／ネガティブの影響は？：一般的に言えることは、ヤングケアラーになることのポジティブ面は人に優しくなれること、ネガティブ面は教育を受ける機会の損失です。
- ダブルケアラーは女性ばかりのように思えるが、男性はどうしているのか？：実際の調査で、男性ダブルケアラー500名、女性ダブルケアラー500名に尋ねた際、ダブルケアは女性だけでなく、男性の切実な問題でもあることがわかりました。男女ともに考えるべき問題です。
- ダブルケアの最初の相談はどうしたらよいか？：地域の中では、まずは地域包括支援センターに相談してみてください。企業では社内の産業カウンセラーに相談を、内部での相談が難しければ外部のお医者さんに相談して企業に働きかけてみてください。

#### 5 まとめ

最後に、相馬さんと植木さんより、まとめの言葉をいただきました。

- 相馬さん：これから必要なことは、市民社会をベースにした「自治型・包摂型・多世代型地域ケアシステム」の構築です。ダブルケアは、社会的な課題を引き寄せるいわば磁石のようなもので、それを社会全体としてどう引き受けるか「ケア民主主義」の問題でもあります。
- 植木さん：当初考えていたダブルケアとはイメージが違ったのではないのでしょうか。ダブルケアのことをもっと知りたいと考えて、ダブルケアカフェの活動を各地でしています。今回の話をぜひみなさんの周りの3人に、そしてその3人からさらに3人に…という感じで広く伝えていってほしいです。



#### <成果および課題>

- ダブルケアについて自分自身が学びたいと思って開催した分科会でしたが、単に子育てと介護だけでなく、多重ケアと考えた場合には、孫支援・家族・障害・病気・労働などの問題も入ってくることや、最終的には市民社会や民主主義の問題にまで行き着く課題の底の広さに発見がありました。
- ダブルケアについては、これという統一的な処方箋がなく、個々のニーズに沿った形で対応していくことが必要で、そのような支援体制をどう社会として構築していくかが大きな課題と感じました。

#### 参加者の声（アンケート結果などから）

- ダブルケアとは何か、どのような思いがあるのか知ることができてとてもよかった。多重ケアの可能性がある方々が周囲にたくさんいるかもしれないと気がつくことができ、どう寄り添うべきか考えていくきっかけとなった。自分もなるかもしれないので、今後もしっかりダブルケアについて考えていきたい。
- ダブルケアを理解することの先に社会的包括が考えられること、それが大変よく理解できたこと、概要、実態、グループでの共有含めて、構成がテンポよくあきませんでした。
- 相馬先生、植木さんのお話を聞きたいと思っていたので、今回参加できてよかったです。「子育て支援」「介護」と特定世代、状況を捉えての支援だけではなく、包括的な視点で考えることの大切さを感じました。

#### 企画・運営

市川 徹（株式会社世田谷社／一般財団法人世田谷コミュニティ財団）【主担当・報告書】

## 2 1 政治を語って、暮らしやすい未来を創ろう！

### 開催目的

私たちの暮らしは全て政治につながっています。そして、私たち、市民には政治を変える力があります。にも関わらず、政治を自分とは関係ないものと考えている人が多いことから、市民と政治の関りや市民の役割、実際に身近な疑問を調べ、地域を変えていこうと動き出している方から話を伺い、自分と政治が密接に関係していることに気づき、自分たちが日々の暮らしの中でおかしいと感じていることや政治について感じていることをいろいろな世代で語ることで、政治へのタブーなイメージを払拭することを目的に開催しました。

### 開催日時

2月9日（日）10:00～12:30

### 参加者数

22名（参加者14名、出演者2名、スタッフ6名）

### 出演者

若林 秀樹さん（認定NPO法人国際協力NGOセンター（JANIC）事務局長）

久田 夏実さん（いたばし未来ラボ 研究員）

### 内容・成果・課題

#### 1. 講演

ご自身も参議院議員として経済・産業、外交、安全保障、憲法等に取り組まれていた若林さんからは、政治と市民の関係性について、主に“国政”についてお話いただきました。政党は選挙に勝ち、政権を取るために政策の優先順位が高くなる傾向があり、必ずしも、その時の社会に一番相応しい政策であるとは限らない。企業は利益創出を主目的としており、利益があがらなければ、事業を中断するのに対し、市民社会は政府から独立した立場で、継続的で一貫性の高い、純粋に社会的ニーズに沿った活動を行うことができる、だからこそ、市民社会の役割が重要であると話されました。

また、日本では、「直接選挙」にて市民の代理人となる代議士（正確には衆議院議員を指す）を自由に選べることができますが、そのような国は、世界では必ずしも当たり前ではない。にも関わらず、日本の選挙投票率は先進国でも最低レベル。市民と政治との距離が遠くなっているが、我々一人ひとりが未来の方向付けができる、責任をもった、力のある市民であること意識し、シチズンシップ感覚を持ち、必要な行動に出ることが、いま必要だ！と、お話しいただきました。

続く、久田さんからは、ご自身が暮らす板橋区での活動についてお話しいただきました。出産を機に仕事を辞め、当初は利用者として活用していた地域のコミュニティスペースのスタッフになり、区議会議員の事務所でも働くことになりました。その区議が始めた「いたばし未来ラボ」の研究員としての活動を紹介いただきましたが、「いたばし未来ラボ」とは、一人ひとりの住民の声を政策に活かすために、テーマごとに学びあう場として立ち上げられたもので、自然環境や社会復帰できる社会に向けた取り組み、中高年のひきこもりの調査など、いくつかのプロジェクトが動いています

久田さんの取り組んだテーマは、『子育てに関する制度』。例えば、児童手当は子どものための手当てにも関わらず、夫婦のうち年収の高い方に支払われることに対して問題提起をしたり、行政から出された無償保育化に伴う補助の内容に関して、実際に幼稚園に配布された文章を修正し、保護者に理解されやすい内容に変更してもらうなど、当事者ならではの目線での活動について紹介いただきました。



## 2. グループディスカッション

若林さん、久田さんからのお話を受け、参加者のみなさん一人ひとりが疑問に思っていること、他の人と意見交換したいことを発表してもらいました。そこから、「政治を身近に」、「政治・社会・暮らし」、「若者と政治」の3つのテーマに分かれてじっくりと意見交換をしていきました。各グループとも活発な話し合いがされていましたが、どんな意見が出ていたのか、少しご紹介します。

「政治を身近に」：政治=国政というイメージがあり、あまり身近に考えられない、暮らしが政治につながる仕組みが必要。今日みたいな事例を知る場が必要。そもそも政治家はなりたいたい職業ではない。

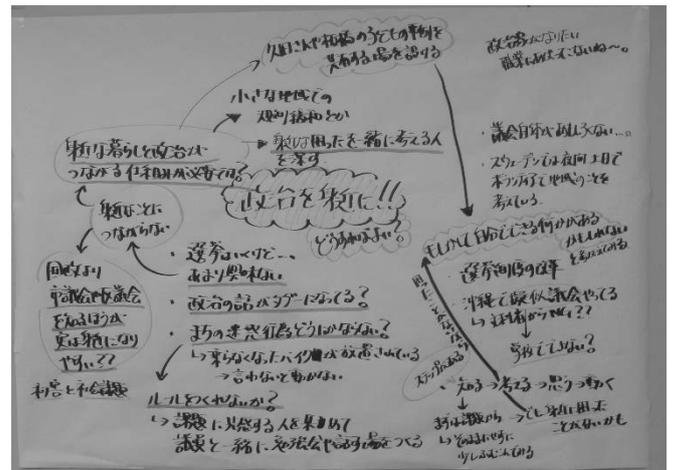
「政治・社会・暮らし」：政治を知る場がない、女性の政治参加も少ないから、女性にエールを送りたい。投票率を上げるためにもっと工夫が必要。国政と地方政治の違いもある。

「若者と政治」：若者が安心して意見を言える場を作り、大人がしっかり声を聞く、子どもの頃から家庭で政治の話をする、若者が生身でいろいろな人や物事にぶつかる経験をする必要がある。

## 3. まとめ

最後に、登壇者の若林さんからは、「政治は国民の意識のあらわれ。政治家は次の選挙に勝てるかどうか重要、だからこそ、市民がもっとオープンに政治を語り、市民主導で政治を動かすことが大事。日本は中央集権だから、地方政治の限界もある、地方政治+国政を考える必要がある」こと、久田さんからは、「地方政治を中心に活動しているが、やはり国政にも目を向ける必要があると感じている、学生や若者が発言しやすい環境を作っていく必要がある」とのコメントをいただきました。

日本では政治を語ることにタブーな雰囲気がありますが、自分たちの社会をより良くするためにも、もっと政治を気軽に話し合う場を作っていく必要がある、と改めて感じました。そのためにも、異なる意見の相手ともしっかりと向きあい、お互いの話を聞く姿勢も大切だと思います。



## 参加者の声（アンケート結果などから）

- ・政治=国政、難しい、身近ではない、というイメージがあったけど、久田さんの話を聞いて、政治のイメージが変わりました。身近な困った事や身近にできることがあるかもしれないという発想が大切だと感じました。
- ・知識がなかったが、一言いうとグループの皆さんが色々な意見をくれ、発することで何かが変わるきっかけになるという感覚を味わえるディスカッションの時間でした。
- ・関心があったのが国政だけだったが、地方の政治に目を向けるべきだと気付けた。様々な職業、世代の人々と交流ができて良かった。自分も政治に関わることができるのだと思えるようになった。

## 企画・運営

神元 幸津江（NPO 法人全国災害ボランティア支援団体ネットワーク（JVOAD））【主担当・報告書】  
枝見 太郎（一般財団法人富士福祉事業団）  
藤田 豊（東京都立新宿山吹高等学校）

## 22 体験から継続した活動へ ～ボランティア証明書で終わらない

### 若者を育てるためのヒント～

#### 開催目的

区市町村の社会福祉協議会等の中間支援組織が夏休み期間、主に中高大生を対象として実施している「夏の体験ボランティア」（以下、夏ボラ）などの体験プログラムは、ボランティア活動の入口として、よいきっかけとなっていますが、参加者のほとんどは、体験のみで終わってしまいます。2020年度から大学入試が大きく変わることもあり、学校では生徒への社会的活動の推進が加速するとともに、体験のみを求める若者が増えているのも現実です。

地域の担い手を育てるため、体験で終わらせず、継続した活動につなげるために、プログラムの主催者や受け入れ団体、また若者と地域をつなぐコーディネーターはどのようなかわり方やプログラムの工夫ができるのか。実際に地域に関わり続ける若者の事例を基に考える場を持ちました。

#### 開催日時

2月9日（日）14:00～16:30

#### 参加者数

32名（参加者23名、出演者3名、スタッフ3名、当日ボランティア3名）

#### 出演者

荒木 優里奈さん（社会人、NPO 法人アクションポート横浜「NPO インターンシップ」参加者）

内海 渚さん（社会人、まつど市民活動サポートセンター「夏のボランティア体験講座」参加者）

新藤 健太さん（大学4年生、まつど市民活動サポートセンター「夏のボランティア体験講座」参加者）



#### 内容・成果・課題

##### 【内容】

##### 1. 事例紹介

中間支援組織が実施する「夏ボラ」等に参加したことをきっかけに、地域での活動を継続している出演者3名より、それぞれの現在の活動紹介と、「夏ボラ」参加の経緯、活動継続に至ったポイント等をお話いただきました。話の中で紹介された活動継続のポイントにつながる話を何点か紹介します。

- ・代表からは、「なぜインターン生に来てもらうのか。それは、新しい知見を求めているからだ。」とされました。なので、ミーティングは大人も学生も一緒です。「学生からみて面白い？」という大人の質問に対して、「ちょっと文が固くてわかりづらい」など率直に感想を伝えています。
- ・コーディネーターに「夏ボラ以外もやってみない？」と誘われました。そこから本格的に夏以外のボランティアに参加するようになり、楽しい、もっとやりたい、と思うようになりました。以降はラインなどに情報が届いた際に、気になる活動に参加しています。
- ・ボランティア活動を通じて「地域」という言葉の意味合いが変わってきたのが自分にとって大きいです。地域の人の思いに対して…学生の自分達に何かできないか、と思うようになりました。ある時、「商店会の会議に顔出してみない？」と言われて参加するようになって、地域の人に自分たちを認識してもらえるようになりました。地域の方は、若さや新しいアイデアというものを求めているけど、特に勉強しているわけでもないし、新しいアイデアも思い浮かびませんでした。けれど、アイデアを出せるよう、すこしずつ努力していこうと思いました。
- ・メンバーに褒められるようになるなかで、やってよかったと思えるようになりました。背中を押してくれる大人がいたからこそ、最後まで頑張ろうと思えました。代表からも「インターンシップを通して学生にも何かを持って帰ってほしい」と熱く何回も語られました。

- ・継続した活動先はボランティアをすごく大事にしてくれる。丸投げではなく、一緒にやってくれる。そういうところはやっぱりいいな、と思って続けています。
- ・学生側の事情を理解してくれたり、自分たちの活動をきちんと評価してくれるところ。学生って夜も結構忙しい…と伝えたら、早めの時間から説明会を開いてくれました。お昼の説明会の際は、飲み物とパンをいただいたこともありました。そういうちょっとした気遣いをしてもらえると「頑張ろう」と思えるし、反省会などに声をかけられても、行ってみようと思えました。

## 2. 質疑応答

活動に関する質問のほか、「中～大学生向けのボランティア体験を企画したことがあるが、なかなか参加者が集まらない。こんな言葉かけや、しかけをするとよい、というようなものがあれば教えてほしい。」という質問があがりました。

これに対して、出演者より、「SNSの時代なので、インターネットでの発信も強化していくのがよいのでは」、「楽しそうなチラシやHPのデザインだと良い」、「チラシの写真についても同年代の子が写っていると安心する」、「大学の中でも情報が分かるとよい」といった意見がありました。

## 3. グループワーク

「体験から継続した活動につなげるためのポイント」について各グループで意見交換し、まとめたものを全体で共有しました。グループからは以下のような意見が出ました。

- ・若者の話、やりたいことをしっかり聴く
- ・少し高い目標を達成するような活動を（達成感につながる）
- ・休憩時間のときに団体や活動を知ってもらう機会をつくる
- ・感謝の言葉を伝える
- ・楽しいだけではなく、嬉しいを若者と共有する
- ・若者との関係性を育むことのできるクッション人材が大事
- ・同世代に自身の活動の発信する機会をつくる（ふりかえりにもつながる）
- ・若者の活動のサポート体制を考える（金銭面や飲食も含める）
- ・秋以降もボランティア活動を継続できるような場や仕組みづくり

### 【成果と課題】

若者が参加する活動について、大人だけで考えてしまうことが多いですが、今回の分科会を経て、やはり若者の声を聞くことが大事という想いを参加者間で共有することができました。そして、実際に若者の生の声に、若者と地域をつなぐ立場にある人たちが耳を傾け、若者の活動しやすい場づくりを考えるきっかけになったと思います。

しかし、想いと継続した活動につながるためのポイント、といった若者と地域をつなぐ立場にある人たちが大切にしたいことについて、大枠の共有はできたが、それぞれの現場で、具体的な工夫策を持ち帰るまでの細かい議論まではできませんでした。この日できた参加者間のつながりを活かして、情報交換が進み、それぞれの現場で、継続した活動につながるアクションが生まれることを期待しています。



## 参加者の声（アンケート結果などから）

- ・なんと言っても学生さんの素直な気持ちをたくさんお聞きできたのは、とても参考になりました（登壇の3名が、大人が何を聞きたいかよく理解していただいていたからだと思います）。また個人で活動している子と団体で活動している子では、少し対応が変わるので、きっかけや活動方法が三者三様の話しは大変参考になりました。
- ・特に学生さんが大人に「きっかけを与え続けてほしい」「適度な責任感と適度な評価がほしい」など、わかっているつもりでしたが、何を求めているか改めて認識させられました。そしてそれに応えるには大変な忍耐も必要であるので(笑)、新年度にむけて改めて気持ちを引き締めていきたいと思えます。

## 企画・運営

鹿住 貴之（認定NPO法人JUON（樹恩）NETWORK）【主担当】

芦澤 弘子（聖学院大学ボランティア活動支援センター）【主担当・報告書】

小林 理人（青梅市社会福祉協議会 青梅ボランティア・市民活動センター）

## 23 発達障害がある大人×「周囲のあなた」 =持続可能な就労環境？

### 開催目的

私（分科会発案者）は、現役で働いている大人の発達障害の当事者です。外見から見えにくい障害がありながら働き続けることは、毎日がハプニングと課題発見の連続で、障害がある部分の事実と社会人として組織に貢献しなければいけない事実の板挟みで悩むことも多いです。

そこで、今回、働く大人の発達障害者とその周囲の方々に呼びかけ、大人の発達障害者が抱える課題について学び考え、両者が共に生き、折り合い方を探り合う場を提供したいと考え企画しました。

### 開催日時

2月9日（日）14:00～16:30

### 参加者数

31名（参加者26名、出演者2名、スタッフ3名）

### 出演者

○武智 俊典さん

東京都発達障害者支援センター  
発達障害者地域支援マネージャー

■プロフィール

筑波大学大学院修了後、自閉症を中心とした発達障害児者の療育、支援に従事。現在は東京都発達障害者支援センターにて発達障害者地域支援マネージャーとして地域における支援体制の整備と充実に向けて活動している。

○金子 智紀（かねこ ともき）さん

慶應義塾大学 大学院 政策・メディア研究科 修士課程

■プロフィール

高校時代、生徒会活動で子供から高齢者まで誰もが暮らしやすい地域づくりのための活動に関わる。成城大学に入学後、パターン・ランゲージの手法を知る中でパターン・ランゲージ×福祉の可能性を感じる。パターン・ランゲージ研究/実践における日本の第一人者の元で学ぶため成城大学を退学し、慶應義塾大学に入学、旅のことはプロジェクトに参加。

○発達障害がある大人

一般就労で働く当事者であり、保育士6年目、社会人15年目の発達障害者。  
ボランティア団体「スタンドアップフォーマルチカラース」発起人。

### 内容・成果・課題

1) 現状と課題

働いている大人の発達障害は、当事者の自己開示の問題、障害と組織のルールとの調整、雇用体系など多くの課題がありますが、「課題があるということ」自体が社会的に十分に共有されたとは言えない状況であることが課題と私は認識しています。

2) 分科会で設定したゴール

最終的に一つの解を求めないことをゴールに設定しました。当初は「皆が楽に暮らせるように〇〇をして折り合いを付けよう」という風に各グループに答えを考えてもらうことも検討していましたがそれでは参加者一人一人の課題には寄り添えないことに気がつきました。そこで、何か一つの対策を考えるよりも各々の感じている大人の発達障害にまつわる課題を深く自己開示してもらうことに力点を置き、それぞれのエピソードから「共に生きる」「課題と折り合いをつける」方法を各人が学び合えたらよいのではと考えました。

### 3) タイムスケジュール

14:00-14:50 大人の発達障害について概要説明

15:00-16:00 パターン・ランゲージによるワークショップ※

※パターン・ランゲージとは、成功している事例の中で繰り返し見られる「パターン」が抽出され、抽象化を経て言語（ランゲージ）化されたものです。

### 4) ワorkshopで話し合われた自己開示の一部紹介

非常に個人的な自己開示が多く出たため、個人がわからないように要約しています。

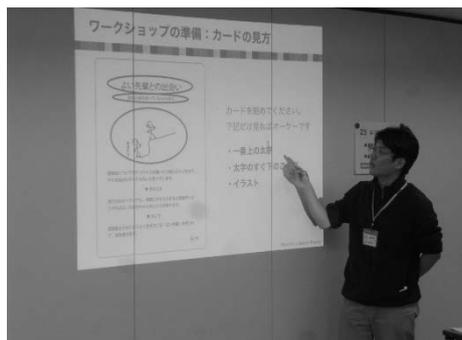
- ・当事者にとっても近い立場にいるので、障害がある人が職場でどのように苦しむのかを知ってほしくて参加した。障がい者雇用をされていると、自分自身の能力以下の仕事しかできなくなり、専門性を発揮できなくなることがある。そこに折り合いがつけられず、苦しい人もいることを知ってほしい。
- ・会社の中で当事者のような人を見かけるときがある。しかし、開示されていないため「助けてほしいか」と声をかけることもできない。どのように工夫したらいいのかわからなかったので意見を聞いてみたくて参加した。

### 5) 得られた成果

- ①何人かの参加者にとっては、当日、大人の発達障害の当事者が複数人参加しており、ワークショップの中で自己開示をしてきていたため、大人で発達障害を持ちながら働くということの「しんどさ」をリアルに感じられたようでした。
- ②援助職の方、当事者の方、周囲の方など、立場の違う方々が本分科会に参加しそれぞれの意見を述べ合ったことについて貴重な経験であったと評価してくれました。その点でボランティアフォーラムならではの出会いの妙といえる成果が得られたのではないかと考えています。

### 6) 企画者として

個人的には、大人の発達障害者が組織の中でその人が持つ固有の課題と組織の論理との間で生まれる軋轢に折り合いをつける一番の方法は、折り合いを一緒に見つけてくれる仲間を組織の中で見つけられるかどうかが鍵になると思っています。本分科会「大人の発達障害×周囲のアナタ=持続可能な就労環境？」という問いに対して、「結局どのような折り合いをつけるか」ということについて、何か一つの明確な答えを出すようなことはしませんでした。しかし、参加者の方一人一人が本分科会で得た学びを基に、自分の所属する組織の中で発達障害があると思われる人が「共に生き」「折り合いをつける」ためのキーパーソンになって頂けたらと願っています。



## 参加者の声

- ・常識は違うことを話しあうことで気づくことができました。
- ・自分に発達障害の傾向があるので参加しました。就職や進学の時少し役立ちそうです。
- ・自分の身の周りでも多かったことだから。話し合うことからはじめていきたいと思います。

## 企画・運営

遠藤 夢沙 (StandUpForMaluticolours 代表) 【主担当・報告書】

藤田 豊 (東京都立新宿山吹高等学校)

水田 征吾 (調布市市民活動支援センター 運営委員)

## 24 盲ろう者も社会で安心して働けるようにするためには？

### 開催目的

盲ろう者（視覚と聴覚に障害のある方）の認知度が低いため、かれらがどのように生計を立てているのか、どのような仕事に就くことができているのか…。社会の中にいる多様な人々が、安心して一緒に働くための環境を作るために、私たちにできることは何かを考えるために開催しました。

### 開催日時

2月9日（日）14：00～16：30

### 参加者数

19名（参加者14名、出演者1名、スタッフ4名）＋手話通訳5名

### 出演者

藤鹿 一之さん（認定NPO 法人東京盲ろう者友の会 理事長）

### 内容・成果・課題

#### 1. 内容

- 1) まず、登壇者(盲ろう者)と聴覚障害者を見て頂き、2人の違いは何かを考えていくことからスタートしました。その後、3分間で、各自それぞれポストイットに書いて頂き、壁に貼って頂きました。参加者からは、「男・女」「目の動きが違う」「男性は少し考え事をしてる感じ」「女性はこちらをみしてくれてる」「男性はまばたきしない」などが書かれていました。
- 2) そして、登壇者の生い立ちなど、クイズ式で講演が始まりました。
  - ・登壇者の最も困ったことはなにか？ ②今 1番、チャレンジしてみたい職業は？ ③最も理解のあった職業は？ ④配慮してくれた職場のスタッフに、どのような形で お礼の気持ちを伝えたいか？などを参加者にそれぞれ思うものを手を挙げて頂き、回答して頂きました。その上でどうしてそう思うのかをそれぞれ話して頂きました。
  - ・それぞれのクイズの後に、登壇者の経験を踏まえ、参加者の皆さんが笑ってしまうような面白い話もして頂きました。特に、クイズの中で3つの選択の中で「極道」というものがあり、参加者たちは、興味深々に手を挙げていました。クイズ式は、受講生の興味をそそるようなものがあった光景でした。
  - ・また、聴覚障害者と違って、盲ろう者という認識が低い中、仕事も思うようにいかないこと、という仕事があるか？などを参加者に考えてもらいました。



## 参加者の声（アンケート結果などから）

---

- 様々な障害について学ぶことが出来た
- 支援についても自分で考えている事よりたくさんある事を知って良かったです
- 藤鹿さんがとても面白く分かり易く、お話して下さり、ただ聞くだけでなく参加者が自分で考える箇所もいろいろあり、興味深く拝聴しました。参加者の御意見にもありましたが、まずは自分にできることから（一緒に通勤など）勉強・実行したいです。養成講座も参加したいと思いました
  
- 最新のAI福祉機器の話も伺えてびっくりすることが多かったです。なによりも、盲ろう者でしかも中途での障害受容はとてもご苦労があったと思うのですが、くるしいことはいわず努力され克服してこうして今日お話されている事に頭が下がる思いです。
- 藤鹿さんから盲ろう者の就労するために必要な事、困難な事について詳しく話を聞くことが出来ました。盲ろう者も健常者もお互いに歩み寄り、スムーズな社会生活が共有できるように、しなくてはならないと改めて教えて頂きました。
- 人と人との繋がりが何よりも大切である。

## 企画・運営

---

石橋 茜（認定NPO 法人東京盲ろう者友の会）【主担当・報告書】

成田 早紀（荒川区社会福祉協議会 荒川ボランティアセンター）

## 25 その「災害への備え」は自分事になっていますか？

### 開催目的

気候変動の影響で、「数十年に一度」と呼ばれるような災害の大型化や頻発化が進んでいます。市民の防災への意識は高まりつつある一方で、新たな災害が起こると「まさか、こんな事になるとは思わなかった」という声も聞こえてきます。災害大国である日本には、知見の蓄積は豊富にあるはという意見もありますが、そうした知見を活かした備えが十分だったと言えるのでしょうか。2019年の台風19号を含め実際の災害に対応した登壇者の率直な経験と学びを伺い、近年は被災していない地域も、どのように防災を自分事として捉えることができるかを話し合いました。

### 開催日時

2月9日（日）14:00～16:30

### 参加者数

29名（参加者21名、出演者2名、スタッフ3名、ボランティア2名）

### 出演者

葛岡 敦さん（調布市市民プラザあくろす市民活動センター）

柴田 貴史さん（社会福祉法人鹿沼市社会福祉協議会）

### 内容・成果・課題

2019年の台風19号の際に地域が被災し、現場で被災者支援にかかわった経験があるお二人を登壇者として迎え、防災と災害対応についてお話を伺いました。東京都調布市の社会福祉協議会に勤める葛岡さんからは、チャリティウォークなどを通じて、平時から市民団体やボランティアとの密接な関係性があったため、災害時には背中を押される形で、組織の枠組みを超えて柔軟に連携することができたというお話をいただきました。一方、栃木県鹿沼市の社会福祉協議会の柴田さんからは、鹿沼市は他の地域で災害が発生した時にブロック派遣とは別に職員を送り、災害ボランティア団体（チームかぬま）が各地の被災地で活動しているというご説明を伺いました。そうした他地域における災害支援を通じて、日頃から様々な地域との関係性が構築されました。台風19号の際、鹿沼市はメディアに取り上げられる機会は多くありませんでした。しかし、災害支援を通じた様々な地域との関係性があったからこそ、鹿沼市のことを気にかけて、多くのボランティアが集まってくれたそうです。お二人ともそれぞれの地域における社会福祉協議会の職員という立場ですが、地域や組織にこだわらず、平時から枠を超えた取り組みが大切であるということを教えてくれました。そうした地道な取り組みこそが、実際に災害が発生した時に活かされました。

参加者からは、お二人の具体的な体験談が大変参考になったという意見を多くいただきました。平時からの連携が大切であるとの学びがあったとの意見もありました。二人の登壇者の話を聞いた後のグループワークでは、起こりうる災害に対して、それぞれの地域でどのように解決の方向性を見出せるか、熱い議論が交わされました。

災害からの学びは多くのところで語られています。被災時に発生する「想定外の課題」は、実はすでに他の地域で直面し、乗り越えてきた解決の知見があるかもしれません。最大の課題は、被災の実体験がない地域が、他地域での課題を自分事として捉えて、本質的かつ具体的な防災と災害対応への準備ができるかということです。本分科会の参加者は、災害対応経験者であるお二人の登壇者の話から、自らの地域の防災と災害対応を考える機会を得ることができたのではないのでしょうか。また、加えて、グループ内の議論が深まったことによって、参加者同士の学びの共有ができたのではないかと思います。災害を恐れるだけでなく、どのように備えて、立ち向かっていくか、前向きに考えるきっかけとなった分科会になったのではないかと期待します。



### 参加者の声（アンケート結果などから）

---

- 関係性を事前に培っていくことの大事さがわかりました。実際の事例からの話で分かりやすかったです。
- 災害時のつながりは平素のコミュニティの大切さとわかりました。
- 登壇者の方の説明は、ジョークをまじえてお上手だったです。ワークも社協の事とか、マンション・団地民と地元民とのつながりについても学びになりました。

### 企画・運営

---

五十嵐 豪（認定 NPO 法人難民を助ける会（AAR Japan））【主担当・報告書】  
神元 幸津江（NPO 法人全国災害ボランティア支援団体ネットワーク（JVOD））  
鈴木 正昭（りすこ（おおた復興支援活動連絡協議会））

## 26 私たちが本当に目指す居場所づくりとは

### ～これからの活動を考えるために組織を見直す～

#### 開催目的

---

さまざまな地域で居場所を運営する市民活動団体は数多くあります。たとえば、近年は子ども食堂（全国に3700か所以上）が注目されています。時がたつにつれ、想定とは違う問題に直面したり、開設当初の思いとは変わってしまったり、取り巻く環境・課題の変化により目的と乖離したりすることもあります。本当に目指していく居場所づくりとはなにか。これからの活動を考えるヒントとなるよう企画しました。

#### 開催日時

---

2月9日（日）14:00～16:30

#### 参加者数

---

42名（参加者30名、出演者3名、スタッフ5名、ボランティア1名、関係者3名）

#### 出演者

---

大村 みさ子さん（子ども村:中高生ホットステーション 代表）

小池 良実さん（岡さんのいえ TOMO オーナー）

長田 英史さん（NPO 法人れんげ舎 代表理事）

T V A C居場所づくり研究委員会ほか

#### 内容・成果・課題

---

##### 【内容】

ゲストの大村さん、小池さんのお二人の事例を基に、長田さんの解説と進行で実施しました。ゲストのお二人の活動概要のほか、事例の内容については主に以下の二つの視点でお話いただきました。

- ・個々の仲間の思いと、活動目的との関係。
- ・実際に、どうして活動を見直そうと思ったのか。

##### 【成果】

転換期を乗り越えたゲストの方々による、他ではあまり聞けないリアルな居場所の現状を伺うことができ、以下の所感を得ました。

- ・団体が転換期になるタイミング（時期）は、その場に集う人たちの関係が起因する形で、その時期が来ることがあります。時には別々の道を歩むことになる場合があるということは、事前に想定しておいても良いことだと思いました。また、別々に歩むことは悪いことではないということを知ることができました。
- ・居場所を開設するにあたり、困難な事情を抱える人が来て、抱える事情を吐露する場合が想定できます。しかし、どの様な場であっても対応できないケースがあるのだという認識をもっておいた方が良かったことを、事例を通して分かりました。その場合は、その事案に対応できる社会資源を知っておくことが必要だと感じました。

##### 【課題】

「子ども食堂」を代表格に居場所づくりは、今や市民活動のトレンドとして位置づけられるといっても過言ではないと思います。しかし、一方で冒頭でも述べた通りあまたに増え続ける居場所づくり（子ども食堂の場合、全国に3700か所以上）に対し、制度や支援の手が行き届いているとは言い難いです。

思いや目的、活動が一致する運営は自力だけでは見直すことがとても難しく、コーディネーション機能をもつ中間支援組織の質的、量的な力がますます期待されるのではないかと感じました。その準備も今のうちにしておいた方が良いのではないかと感じました。

### 参加者の声（アンケート結果などから）

- 具体的な事例を元に、思いが伝わるお話でした。概念化されたお話も分かりやすく、特に、活動への参加者の存在を家の一階二階外階段に例えるなど、長年の経験から形成された貴重なお話が聞けて有意義でした。
- 居場所について、どうあるべきか、どうしていくべきか、などのお話を聞き、考えさせられました。居場所づくりに携わりたいと考えているので、心構えなど学べて、良い機会になりました

### 企画・運営

熊谷 紀良（東京ボランティア・市民活動センター）【主担当】

高橋 義博（府中市市民活動センター プラッツ）【報告書】

村瀬 つむぎ（NPO 法人グッド）



## 27 ボランティアの「始まり」と「今」

### 開催目的

様々な場面で『ボランティア』という言葉が使用され、人それぞれの捉え方も多様化しています。ボランティアに参加することで単位が出る、ボランティアを強制する学校が増加していることや東京オリンピック・パラリンピックのボランティアがブラックボランティアと騒がれたこと、有償ボランティアという言葉が使われ続けることなどから、現在の社会において『ボランティア』という言葉を一人心とひとりが、多様な形で捉えていることを感じます。

時代の流れに沿って柔軟に『ボランティア』を捉えることも必要ではありますが、捉え方が多様化している今だからこそ、『ボランティア』の動きがどのように始まったのか、時代の流れによる変化を振り返る機会を作りたいと考えました。また、「今」の『ボランティア』について多様な世代・立場から考え、『ボランティア』をする視点から『ボランティア』だからこそできることを検討する機会を設けました。

### 開催日時

2月9日(日) 14:00~16:30

### 参加者数

24名(参加者18名、出演者4名、スタッフ2名)

### 出演者

枝見 太朗さん(一般財団法人富士福祉事業団 理事長)

山崎 直子さん(UBS 銀行東京第一営業本部 部長)

神保 彩乃(首都大学東京 4年)

進行: 榎本 朝美さん(東京ボランティア・市民活動センター)

グラフィックレコーダー: 塚本 忠行さん(magical reading-Lab)

### 内容・成果・課題

本分科会では、学生の立場でボランティア活動をしている私、神保、企業の中でボランティア活動の推進をしている山崎さん、民間の推進機関としてボランティア活動、市民活動の啓蒙促進活動をしている枝見さんが登壇し、多様な視点から『ボランティア』について話し合うパネルディスカッションを実施しました。

まず、本分科会の問題提起として、神保から自身の大学4年間のボランティア活動について、始めたきっかけや活動内容の紹介をしました。また、大学4年間のボランティア活動を通して、社会や人それぞれの『ボランティア』についての捉え方が変化・多様化していると感じた経験を話していただきました。次に、山崎さんから自身の活動経歴や企業で取り組んでいるプロジェクト等の紹介がありました。

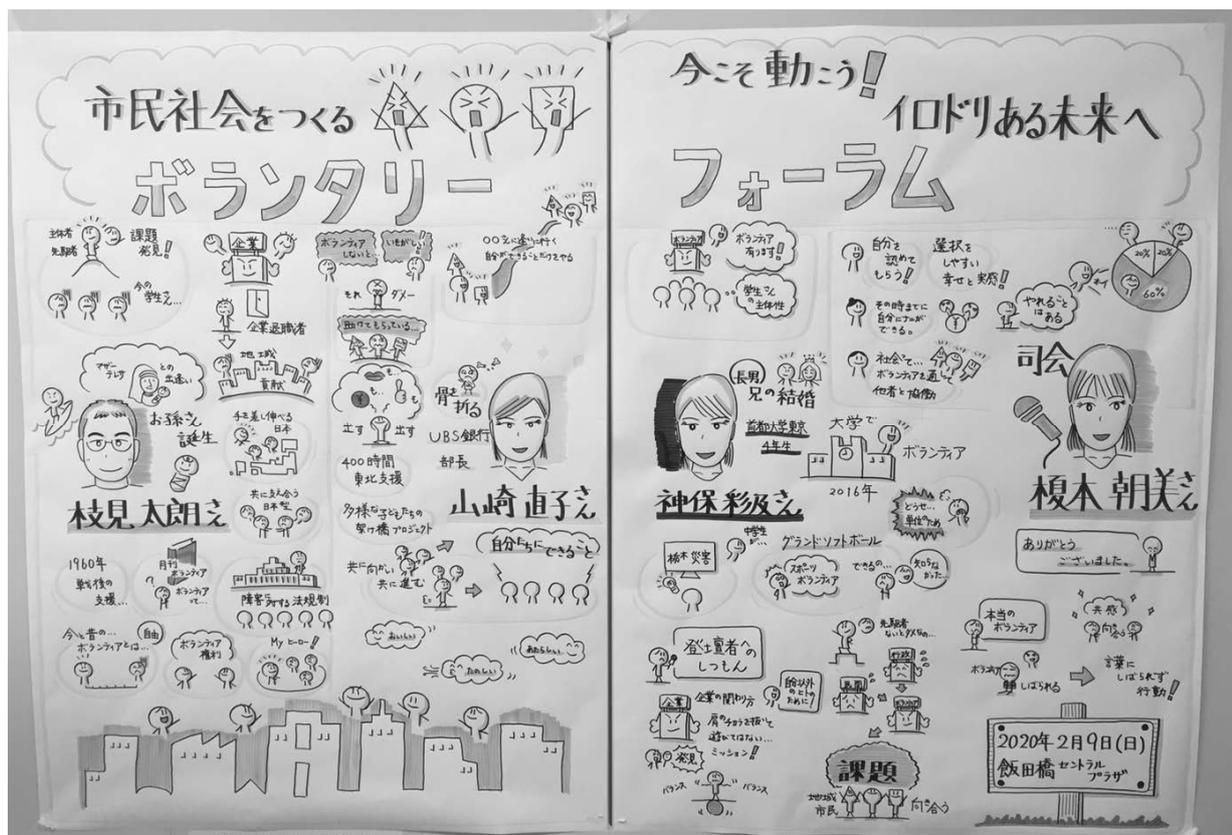
「おいしい・たのしい・あたらしい」をテーマに多くの方がボランティア活動に継続的に取り組むことができる環境を整えるUBS銀行の取り組みは先進的で魅力があふれるものでした。最後に枝見さんからセツルメントのような世界的な『ボランティア』の「始まり」や困難がある者同士が手を差し伸べ合い、支え合う日本的な『ボランティア』の「始まり」について、自身のマザーテレサとの出会い、その出会いから生まれたボランティアへの想いを話していただきました。また、

パネルディスカッション終了後は、登壇者3名の話聞き、印象に残ったこと、さらに聞いてみたいことを参加者同士でシェアしながらボランティアについてグループで話し合い、



後に全体でも話し合いました。参加者から「ボランティアの先駆性とはどのようなものなのか?」、「ボランティア活動を通して生じた戸惑いはあるのか?」などの質問があがりました。また、ボランティアという言葉の使い方への意見があがり、登壇者・参加者全員で『ボランティア』とは何か、考えを巡らせて行きました。

『ボランティア』や『社会課題』などの抽象的な言葉を切り取り、自分の持っている考えを語り合う中で、他の人とは考えが異なる場面もたくさんあったかもしれませんが、しかし、それは悪いことではなく、自分自身の大切にしている価値観や譲れない軸を明確にしていくプロセスでありました。抽象的な言葉・想いを自分自身の中で再度問い直すこと、言語化すること、それを参加者同士で共有する機会を創り出したことは、本分科会を実施した意義であったと考えています。正解があるわけではないこのテーマを引き続き、多くの人が問い続けていく必要性を感じる時間となりました。



作成：グラフィックレコーダー 塚本 忠行さん

## 参加者の声（アンケート結果などから）

- ・いつもボランティアについて深く考える機会もないし、1人で完結してしまう事が多いので、こんな意見の人もいるんだ!と気付くことが出来て、楽しかったです。
- ・ボランティアについてここまで深く話し合うことがなく、良い時間が過ごせました。
- ・和やかな雰囲気でも多くの方の意見が聞けました。グループワークでもっと話したいことがあるくらいでした。実践者の声として参考になりました。

## 企画・運営

神保 彩乃（首都大学東京 4年）【主担当・報告書】

榎本 朝美（東京ボランティア・市民活動センター）

直井 友樹（NPO 法人NICE）

## 28 クロージング～みんなでアクション！～

### 開催目的

クロージングでは、今回のボランティアフォーラムを通し、分科会で感じたことを参加者同士で、グループに分かれて話をして頂きました。さらに、今回のテーマである「今こそ動こう！イロドリある未来へ」にちなみ、アクションプランを作成しました。これは、漠然としたものではなく、「いつまでに、〇〇をする」といった具体的なプランを指します。多くの方々との交流や情報共有を行い、ボランティアフォーラム2020を締めくくりました。

### 開催日時

2月9日（日）17:00～18:30

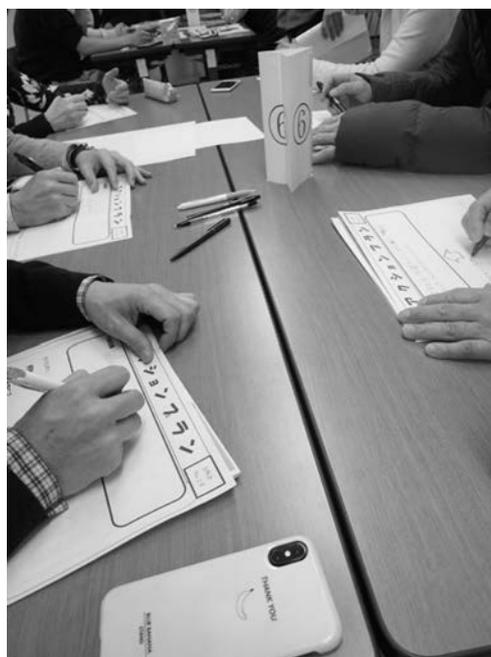
### 参加者数

86名

### 内容・成果・課題

クロージングは、全分科会終了後、参加者の振り返りや交流を目的として実施しました。その中で、今回の全体テーマである「今こそ動こう！イロドリある未来へ」に合わせ、今後のアクションプランを作成するというワークを実施しました。

アクションプランは、まず大きな行動目標を立てた上で、それに向けての具体的な行動と、「いつまでに」という期限を設定します。例えば、「災害が起きた時、困っている人に手を差し伸べる」という行動目標を立てた場合、「ハザードマップや防災マップを確認する」「近所の人に挨拶をして、つながりを保つ」という行動を、「来年のフォーラムまでに」という期限を設けます。このように、アクションプランの作成については、より具体的に作成することを目指しました。これには、漠然と「こうなったら良いな」と思うのではなく、「必ず行動する」という意識を高めてもらいたいという意図があります。



席は、誕生月ごとにグループに分かれてもらいました。当然、グループ内には初対面の方もいますので、自己紹介をすると共に、どのような分科会に参加したか、その感想なども話し合っていました。みなさんそれぞれに強い思いを持って参加されていたため、交流・人脈の広がりという意味でも有意義な時間になったのではないのでしょうか。その後は個人ワークで、アクションプランを作成して頂き、各グループで共有をしました。

参加者の皆様のアクションプラン例としては、「多様な人とコミュニケーションを取る」「自分が関心のある課題の現状を広く伝えていく」などが挙げられました。具体的には、「研修会に参加する」「地域住民とコミュニケーションを取る」などの行動目標を「明日から」「オリンピックまでに」などの期限で実施するといったものが挙げられました。

その後、代表者数名が、全体に向けて自身のアクションプランの宣言をしました。「もっと活動範囲を広げたい!」「自分が関わっている事業の認知を広げたい!」といった強い想いを発表して頂きました。他者前で自分の目標を話すという事は、「(他の人にも言った手前、)やり遂げなければならない」「途中で挫折しない」といったような心理的効果も期待されます。発表された方々も「必ずやり遂げる!」という気持ちになり、気分も高まったのではないのでしょうか。



今回のアクションプラン作成をテーマにした背景としては、「分科会で得た知識や経験をそのままにしておくことはもったいない!」「知識はいつか使うのではなく、今使って欲しい!」という意味が込められています。近年多発している災害や現場で起きている問題は、今現在でも進行しています。「いつか」ではなく「今」行動してほしい!そんな想いが込められています。今回のクロージングで作成したアクションプランを、参加者の皆様にとっての今後の行動指針として頂けたならば、企画した我々としても嬉しい限りです。

## 企画・運営

小林 理人（青梅市社会福祉協議会 青梅ボランティア・市民活動センター）【主担当・報告書】  
神元 幸津江（NPO 法人全国災害ボランティア支援団体ネットワーク（JVOD））  
五十嵐 豪（認定 NPO 法人難民を助ける会（AAR Japan））  
榎本 朝美（東京ボランティア・市民活動センター）

## 29・30 命と食と環境と。雑木林保全活動 ～映画『武蔵野』編～（No.29） ～フィールドワーク編～（No.30）

### 開催目的

江戸時代から続く循環農業が今でも取り組まれています。映画『武蔵野』では古来の農法で作物を育て、まさに命を育む暮らしの中で、自然環境との共生が図られる様子を紹介しています。また、映画『武蔵野』の世界が多摩地域でも実践されています。多摩地域という宅地開発が今なお進む地域で、いかに里山（雑木林）を守ってきたか。保全活動にまつわるお話や体験（フィールドワーク）をとおして、「命・食・環境」をキーワードに、自然との共生とは何かを考える企画として実施しました。

### 開催日時

2月7日（金）19:00～21:00 映画『武蔵野』編

2月8日（土）10:00～13:00 フィールドワーク編（なな山緑地：多摩市）

### 参加者数

2月7日：18名（参加者14名、出演者1名、スタッフ3名）

2月8日：22名（参加者11名、出演者8名、スタッフ3名）

### 出演者

住崎 岩衛さん（なな山緑地の会）

他、なな山緑地の会メンバー7名

### 内容・成果・課題

#### 【内容】

古来の循環農法を継続する地域を取材したドキュメンタリー、映画『武蔵野』の鑑賞を通じた学びを第一段階として、同じく江戸時代から続く古来の循環農法を継続する多摩市の「なな山緑地の会」での体験（フィールドワーク）を第二段階とする連動企画を実施しました。

フィールドワークでは「クズ掃き」といわれる落ち葉を集める作業を体験してもらいました。この活動を行った「なな山緑地」は、今でも宅地開発の進む多摩地域（多摩市の林野面積1.7%）に残る里山です。ゲストの住崎さんからは、試行錯誤の末、守ることに成功した経緯を伺いました。「父親が亡くなり、里山を相続することになったのですが、莫大な相続税がかかります。そこで、この自然を守るために、里山を自治体に寄付し、里山一帯を網掛けするように都市計画法『特別緑地保全地区』の法整備を行いました。そして、なな山緑地の会のメンバーはじめボランティアの参加で、現在も里山は維持されているのです。」と住崎さんはおっしゃいます。

その他にも、里山から集めた落ち葉をたい肥にした野菜作りなどのお話を通し、自然との共生とがいかに大切かを教えていただきました。





#### 【成果】

映画視聴して取り組まれている様子を学び、フィールドワークでは映画で紹介された取り組みを実際に体感することができました。どちらか一方の実施よりも、より一層、自然との共生というテーマでの学びが深まったと思います。

住崎さんから伺ったお話と同様、映画でも雑木林や農地が開発されてしまう場面がありました。首都圏に近ければ近いほど、相続を受ける際の税金が膨大で、結果、手放すことにつながってしまいます。相続問題が自然との共生の場を減少させる一つの要因になっていることを知ることができました。

また、参加者の中には「なな山緑地の会の活動に参加したい」などの意見も寄せられ、本分科会以降の活動にもつながる期待をしています。

#### 【課題】

首都圏での雑木林や農地などの保全をするためには何が必要なのか、課題をもう少し掘り下げて企画化する必要があると思えました。

### 参加者の声（アンケート結果などから）

- ・手入れをしなければ自然も生きていけないのを知った。長い時間をかけて生きているものをなくしてはいけない。
- ・映画を見てから実際に山に行って活動してみて、大変だけど自然の中で環境の循環に関わることのおもしろさが体感できてよかった。
- ・この雑木林が残った経緯や、落葉を掃いてたい肥を作り、それを畑に活用する流れを実際に見せてもらいとても満足だった。山の斜面で作業をしてとても疲れたが充実して楽しかった。

### 企画・運営

高橋 義博（府中市市民活動センター プラッツ）【主担当・報告書】  
鹿住 貴之（認定 NPO 法人 JUON（樹恩）NETWORK）【主担当】  
芦澤 弘子（聖学院大学ボランティア活動支援センター）

## 3 1 多様な世代が関わる「食を通した居場所づくり」 ～ボランティアの入り口を「見る」×「聞く」×「体験する」～

### 開催目的

各地で「食を通した居場所づくり」が広がっています。活動には、中高生や若者、シニアまで幅広い世代が参加しており、ボランティアの入り口にもなっています。分科会では、事例報告をもとにグループワークを展開させて、居場所の取り組みを広げ・継続するためのヒントを共有しました。

さらに、希望する5名の方を対象に、荒川区内の子どもの居場所の活動見学会（2月7日（金）夜間）を実施し、居場所づくりの取り組みを実際に見て・聞いて・体感しました。今取り組んでいる皆さんや、これから活動を始めたい方々が、互いに学び合い、今後の活動に活かせるようなプログラムで実施しました。

### 開催日時

2月9日（日）10:00～12:30

（2月7日（金）希望者のうち先着5名での荒川区内の子どもの居場所の活動見学会も開催）

### 参加者数

25名（参加者19名、出演者4名、スタッフ2名）

### 出演者

佐藤 雅明さん（みんなのリビング葛が谷 代表）

伊藤 未央子さん（社会福祉法人千代田区社会福祉協議会 総務課 高齢者活動センター）

村瀬 つむぎさん（NPO法人グッド事務局）

平野 寛治さん（一般社団法人全国食支援活動協力会 専務理事）

### 内容・成果・課題

参加者層は、「これから居場所づくりを始めたい人」が約5割、「すでに居場所づくりに関わっている人」が約4割、企業や社会福祉協議会等の「活動を推進する立場にある人」が約1割でした。

はじめに、佐藤さんより、2016年から取り組んでいる、個人宅開放型の居場所についてお話を聞きました。新宿区は、全世帯のうち単身世帯が占める割合が65%と、どの年代も孤立しやすい環境にあります。医療機関の相談員として仕事をする中で、「単身者が増え続け、孤立が深まるこの地域で何ができるか」を考えたとき、祖父の建てた家が自由に使える状況にあったことから、持ち家を地域に開く形で居場所づくりを始めたといえます。



活動は主に、①コミュニティカフェの運営 ②ワークショップや勉強会の開催 ③孤立状態にある人の訪問・見守りです。コミュニティカフェでは、梅酒や味噌づくり、会食会など、日常の素朴なことを、あえて一緒にする時間を持ちます。「食べることを一緒にすると、その人の生活がにじみ出ます」と佐藤さんは言い、さまざまな年代の人と、同じ空間で経験する良さがあるそうです。居場所の取り組みを続けるコツは、「自分も助かることをやる」。

人のためと気負わずに、小さくてもいいから、安心できる空間づくりから始めてみては、とのアドバイスがありました。

次に伊藤さんより、「ちよだで多世代交流 Ciao（ちゃお）！」について事例報告がありました。子育て中の親世代の「公園以外に子どもを遊ばせる場がない」「一人で留守番をさせるのが心配」、シニア世代からの「退職してから自分の居場所がない」という声が、多世代交流事業に取り組むきっかけだといえます。1世帯あたりの平均人員が1.78人という千代田区では、家族以外で他の世代と会うことがないという人が珍しくありません。「Ciao！」（イタリア語で朝昼晩問わず使う挨拶の言葉）が意味する通り、気軽に挨拶ができる関係づくりをねらい、2016年1月からスタートしました。

多世代交流事業の担い手は、企画運営サポーターと呼ばれる60歳以上のボランティアの他、企業の社員、小学生や中高生、大学生まで、事業ごとに幅広い世代が参加していることが特徴です。シルバー人材センターにも協力を依頼し、働くことが難しくなった人を対象に、企画運営サポーターとしての参加を促しています。

伊藤さんは、ボランティアによる活動を継続させるために、3つの点を意識しています。①活動の目的を理解し、共感してもらう ②仲間意識：お揃いのベスト、エプロン、バッジ等の作成。反省会や打ち上げも適宜行う ③主体性：役割分担を明確にして、任せる部分は任せる。

親世代にも、習い事や塾では習えない、地域ならではの体験があることを知ってもらうために、次の展開を検討中だそうです。

続いて、村瀬さんより、ワークキャンプ・若者のフリースペース・共同生活寮が一体になった取り組みについてお話を聞きました。グッドは、不登校や引きこもり経験者を含むすべての若者のきっかけづくりを応援する団体で、2001年から板橋区に拠点を置いています。事務所兼フリースペースは、共同生活寮を備え、朝昼晩365日、食卓を囲む風景が見られます。この場に集う人たちを結ぶ共通の話題が「ワークキャンプ」であり、諸外国（スリランカ・タイ・韓国）や国内で合宿型のボランティア活動を経験した若者たちが、語り合ったり、ご飯を作って食べたり…。仲間意識から生まれる安心感がそこにはあります。村瀬さんが、若者たちと過ごす中でよく聞くのは、「自分が何を感じているのかわからない」という悩みだといいます。空気を読むことを優先するために、行き詰まりを感じる若者が多いのです。しかし、ワークキャンプでは、言葉が通じない異国の人と寝食を共にし、汗を流すうちに、彼らの“顔つきが変わる”から、奥が深いのだそうです。

グッドが大切にするのは、多様な経験をもつ人たちが“混ざる”こと。縦・横・ナナメの関係に触れ、身近なロールモデルを見つけ、関わる人自身の成長の糸口にもなる、という居場所づくりの原点を振り返るきっかけをいただきました。

3名の事例報告を受け、アドバイザーの平野さんより、「居場所を始めるときは、初期費用が掛かる。こども食堂へのアンケートからは、運営費に持ち出しを充てたことあるとの回答が約6割あった」「居場所は、地域の食文化や、食べることの大切さを伝える場にもなる」との課題提起がありました。

後半は、想いを持つ人が活動を広げ・継続するための方法を皆で考えようと、「私の身近にこんな居場所があったらいいな」をテーマに、5グループに分かれて意見交換を行いました。

企画側の学びは3つありました。居場所づくりは、①他者のための活動でありながらも、活動する側の所属意識を生み出している ②ボランティアスタッフのモチベーションの調整により、人が集まりやすくなる ③気軽に始められる一方、人手の確保・拠点の整備・備品や食材の調達ルートなど、初期に揃えるべきものがそれなりにあるため、負担なく活動を続けられる方法を、幅広い分野の人と共有する必要がある、ということでした。

## 参加者の声（アンケート結果などから）



- ・さまざまな形の居場所があることを知ることができて良かった。特に自宅で始める方法があることを初めて知って良かったです。
- ・小さな居場所でもいいのだということと、必要な役割分担もあることがわかった。
- ・グループワークの時間では、実際に居場所づくりの活動をしている方や、企業の方とお話できて良かった。
- ・《活動見学会の感想》現場を体験することで、安全・安心な場を肌

で感じることをできたのが大きな収穫だった。

- ・《活動見学会の感想》実際の活動場所に行くことで、代表者のみならず、参加者や活動者（ボランティア）の想いにも触れることができました。参加者の方ともう少しお話をしてみたかったです。

## 企画・運営

齊藤 友歌里（老人給食協力会ふきのとう／一般社団法人全国食支援活動協力会）【主担当・報告書】

村瀬 つむぎ（NPO 法人グッド）・

鈴木 正昭（りすこ（おおた復興支援活動連絡協議会））

## 3 2 Open Café（休憩スペース）

### 開催目的

---

分科会の合間に一息つきたい、知り合った方ともっと話したい…。  
参加者・来所者とともに、くつろぎと交流のスペースをつくれます。

### 開催日時

---

2月8日（土）・9日（日） 10:00～17:00

### 参加者

---

ボランティアフォーラム参加者の皆さん、実行委員、ボランティアスタッフなど  
東京ボランティア・市民活動センター来所者の皆さん

### 内容・成果・課題

---

- ・休憩スペース（カフェ）の運営と交流のきっかけづくりのために、いくつかの仕掛けを用意しました。
- ・数種類のインスタント飲料（コーヒー、カフェオレ、紅茶、ココアなど）を用意し、自由に飲めるようにしました。
- ・各机にお茶菓子（協賛：株式会社ガイア、モンデリーズ・ジャパン株式会社）を置き、自由に食べられるようにしました。
- ・「家庭用焼き芋焼き機」でホクホクに焼いたさつまいもを、一口サイズに切って提供しました。
- ・ボランティアスタッフや実行委員などの担当者は、インスタント飲料の補充やポットのお湯の継ぎ足しを行ったり、皆さんが気持ちよく過ごせるよう、机をきれいにしたり、ごみを片づけたり等を行いました。
- ・参加者と楽しく会話をしたり、一緒に手話の勉強をし交流を図りました。
- ・ボランティアフォーラム 2020 井戸端トークのスペースを設置し、実行委員と参加者の交流もみられました。

### ボランティアの声

---

- ・手話で自分の名前を覚えられ、嬉しかったです。
- ・東京ボランティア・市民活動センターの来所者も立ち寄ってくれ、ボランティアフォーラムのことを説明出来たので、知ってもらえる良い機会になったと思います。
- ・ボランティア同士も交流する機会となり、自分が知らない世界のことを知る、良いきっかけとなりました。

# OPEN CAFE



## 33 ふれあい満点市場～NPO・NGOの作品展示販売～

### 開催目的

通販やインターネットでいろいろな物が買えるようになった時代。みなさんは、自分が普段なにげなく使っている物を作っている方を知っていますか。ふれあい満点市場では、ボランティアグループや福祉作業所の方が、手作りの作品を展示販売しています。作品には、作り手の思いがこめられています。お買い物しながら、作品ができるまでのことや、作品を作っている方のことを聞いてみませんか。

### 開催日時

2月8日（土）10:30～15:30

### 参加者数

12団体・41名（参加団体スタッフ32名、スタッフ3名、ボランティア6名）

<団体名>

- ジャカルタ・ジャパン・ネットワーク
- 東京都青年団体連合
- NPO法人共同作業所かたくり
- NPO法人地球と友と歩む会 LIFE
- NPO法人飛鳥会 つばさ工房
- オレンジライン
- 認定NPO法人フリー・ザ・チルドレン・ジャパン
- 民間相談機関連絡協議会
- 認定NPO法人沖縄・球美の里
- 特定非営利活動法人MHF
- 東京ボランティア・市民活動センター



### 内容・成果・課題

「ふれあい満点市場」は、福祉作業所やボランティアグループ、国際協力団体等の物品を東京ボランティア・市民活動センター（セントラルプラザ10階）で常設された委託販売スペースです。

顔と顔を合わせて「ふれあう」ことを大切にしたいという思いをこめていますが、実際に活動されている方とふれあう機会は多くはありません。

出展会場は、セントラルプラザ1階の区境ホールで、吹き抜けで明るく、人通りのあるオープンスペースです。セントラルプラザへ来所された方や買い物にいらした方、単に通行された方も気軽に立ち寄っていただけるような雰囲気づくりをし、そこで作り手の顔が見え、思いが直接伝わるように、活動に関わる団体の方々や作品を作っている方々と一緒に出展販売を行いました。

団体の方は商品についての工夫した点やこだわった点などを積極的に伝えたり、団体の活動についての質問に丁寧にお答えする方もいらっしゃいました。

今年度は参加団体の方が、活動紹介の一環として、外国の民族楽器「アंकロン」を参加者と一緒に演奏し、会場を盛り上げて下さいました。

また、今年も都立新宿山吹高校の生徒さんに出展団体の販売のお手伝いや出張販売、チラシの配布等ボランティアとして協力してもらいました。生徒さん、団体さんにとって貴重な交流の場となったようです。



### 企画・運営

西山 はな（東京ボランティア・市民活動センター）【主担当・報告書】

田中 貴子（東京ボランティア・市民活動センター）

都立新宿山吹高校ボランティアの生徒さん

## 34 情報誌『ネットワーク』表紙原画展

### 開催目的

東京ボランティア・市民活動センターが発行している市民活動情報誌『ネットワーク』（隔月刊・7000部発行）の表紙原画展を開催。2016年度よりフローラル信子さんに描いていただいている表紙はとても好評で、ボランタリーフォーラムの特別企画として原画展を催してきました。今回も「ぜひ、原画展を！」との声を受けて展示しました。

本誌の読者には原画の美しさを、本誌を知らない方には本誌を知っていただくきっかけとして、また、分科会の合間の休み時間などに癒しのひとときを提供できたら、という想いで企画しました。

### 開催日時

2月7日（金）～2月9日（日）

### 参加者数

ボランタリーフォーラム参加者の皆さん、実行委員、ボランティアスタッフなど  
東京ボランティア・市民活動センター来所者の皆さん

### 出演者

フローラル 信子さん（イラストレーター）

### 内容・成果・課題

今回は、2019年度の『ネットワーク』表紙イラストの原画を掲載しました。フローラル信子さんには、特集テーマのみ伝え、そこから着想したイラストを自由に描いていただいています。毎年、イラストのモチーフやタッチが異なり、読者の方々にも楽しみの一つとなっています。19年度は動物をメインに描いていただくことが多かったように思います。原画を送ってくださるときに同封されている、イラスト付きお手紙も掲示させていただきました。



実は、この表紙原画展はボランティアフォーラムの1週間ほど前から2月末まで展示させていただきました。素敵なイラストをより多くの方に見ていただきたい、というシンプルな気持ちからです。そして、じっくり見たり、何度か見る機会のある方には、イラストに込められたフローラル信子さんの想いを感じていただけるのでは……という期待もありました。フローラル信子さんのイラストには、種の異なる生き物が一緒に過ごしている姿や、自然に手を貸しているようなシーンがあります。編集担当への手紙に添えるメッセージやイラストにも、優しさや心配りを感じることができたと思います。ボランティアフォーラム会期中は、恒例となっているOpenCafé が開催され、原画展とともにフリースペースは華やかな雰囲気になりました。お茶やコーヒー、お菓子を口にしながら、イラストを眺める人びとの姿も多く見受けられました。フォーラムの前後の掲示期間を含め、年代のさまざまな多くの来所者の方が足を止めて見てくださっていました。イラストの前でのグループ撮影や自撮りをされていた方もいて、フローラルさんのイラストの魅力を実感しました。

### 参加者の声（アンケート結果などから）

「もともと良いなと思っていただけれど、原画はもっと素晴らしいですね」「カワイイ!!」「クリアファイルなどにしてくれたら買いたい」などのご感想をいただきました。また、気に行った表紙の『ネットワーク』を手に取り、「特集テーマも関心があるので」と購入された方もいました。複数でイラストを見ている方々もいましたが、お一人でじっくりと見ている方が多かった印象があります。

### 企画・運営

秋池 智子（東京ボランティア・市民活動センター）【主担当・報告者】  
 佐藤 新哉（東京ボランティア・市民活動センター）  
 山口 いさえ（東京ボランティア・市民活動センター）  
 西山はな（東京ボランティア・市民活動センター）



# 市民社会をつくるボランティアフォーラム TOKYO 開催状況

回	開催年	全体テーマ	カテゴリー
1	2004	「つなぐ つながる つなぎあう」	なし
2	2005	「つなぐ。つながる。つなぎあう。」	一日コミュニティスクール、災害から生をみつめる、IT がつなぐ、街を発見する足たち、アートがまちに作用する、ホームレス問題と私たちの暮らしを考える、私にとってのボランティア、介護をかんがえる、社会の仕組みを考える、虐待を防ぐ
3	2006	「つなぐ、つながる、つなぎあう。」	体験ボランティア入門編、ブラッシュアップ NPO/NGO、社会の課題最前線！、アート、社会のしくみ
4	2007	「気づく、動く、変える、市民の力。」	格差社会、制度・仕組みの欠陥・ひずみ、社会の課題最前線、ボランティアズム
5	2008	「危機（クライシス）に立ち向かう市民活動」	福祉制度の崩壊から創造へ、環境破壊と創造、ボランティアズム復活への道、暮らしをみつめて
6	2009	「今、市民として“生きる価値”を問う」	社会の仕組みと制度、安心して暮らせる地域社会づくり、「市民社会」の担い手づくり、お金で買えない価値
7	2010	「希望は市民（わたしたち）が創る」	つながる、発信する、考える、育てる
8	2011	「市民（わたしたち）が創る公共～紡ぎあう地域の絆～」	社会に必要な仕組み、地域とのつながり、育ちあう市民、ボランティアズム
9	2013	「試される市民力（わたしたちのちから）」	つながり、生活・くらし、若者の市民力、ボランティアズム
10	2014	「気づく・築く 市民力（わたしたちのちから）」	生活・くらし、地域・居場所、若者の市民力、ボランティアズム
11	2015	「今を想い、未来をつくる」	グローバルとローカル、暮らしと居場所、ボランティアズムと組織運営、いまと未来
12	2016	「私たちがつくる あしたのピース」	なし
13	2017	「暮らしの中から動きだす、創りだす。」	地域、居場所、子ども・若者、市民活動・NPO、ボランティア、社会・制度、当事者・多様性、フィールドワーク
14	2018	「つながりをずっと 出会いをもっと」	社会・しくみ、ミエティ、参加のかたち、生き方・はたらき方
15	2019	「イロドリある未来へ～わたしから踏みだす一歩～」	参加・人の力、ダイバーシティ、カタチ、時代・未来
16	2020	「今こそ動こう！イロドリある未来へ～」	今見えていること（社会課題）、未来の課題・未来に向けて今すべきこと、ボランティアな動き

\*2012年は「第20回全国ボランティアフェスティバル TOKYO」開催のため未実施

## 市民社会をつくるボランティアフォーラムTOKYO2020 実行委員会名簿

	氏名	所属団体	備考
1	芦澤 弘子	聖学院大学ボランティア活動支援センター	
2	五十嵐 豪	AAR Japan (特定非営利活動法人難民を助ける会)	
3	石橋 茜	東京盲ろう者友の会	
4	市川 徹	株式会社世田谷社／一般財団法人世田谷コミュニティ財団	
5	犬塚 尚樹	NPO法人ふれあいの家 おばちゃんち	
6	上田 英司	日本NPOセンター	
7	枝見 太朗	一般財団法人富士福祉事業団	
8	遠藤 夢沙	スタンド・アップ・フォー・マルチカラース	公募
9	鹿住 貴之	認定NPO法人JUON (樹恩) NETWORK	
10	神元 幸津江	全国災害ボランティア支援団体ネットワーク (JVOAD)	副委員長
11	黒岩 堅	東京Wrap	公募
12	小林 理人	青梅市社会福祉協議会 青梅ボランティア・市民活動センター	
13	紺野 功	NPO法人エンリッチ	公募
14	斉藤 友歌里	老人給食協会ふきのとう (一般社団法人全国食支援活動協力会)	
15	柴山 智帆	glolab	
16	神保 彩乃	首都大学東京 4年	
17	鈴木 正昭	りすこ (おおた復興支援活動連絡協議会)	
18	高橋 義博	府中市市民活動センター プラッツ	委員長
19	橘 義明	中央労働金庫	
20	直井 友樹	NPO法人NICE	
21	成田 早紀	荒川区社会福祉協議会 荒川ボランティアセンター	
22	福永 理紗	かえつ有明高等学校 2年	公募
23	藤田 豊	東京都立新宿山吹高等学校	
24	水田 征吾	調布市市民活動支援センター 運営委員	
25	牧野 斉子	NPO法人ワーカーズコープ	
26	村瀬 つむぎ	NPO法人グッド	
27	森本 美花	NPO法人日本ゲートキーパー協会TOKYO	

(50音順・敬称略)

### ●事務局

	長谷部 俊介	東京ボランティア・市民活動センター	
	熊谷 紀良	東京ボランティア・市民活動センター	
	谷口 陽香	東京ボランティア・市民活動センター	
	榎本 朝美	東京ボランティア・市民活動センター	
	村上 カヤ	東京ボランティア・市民活動センター	

## ■協賛・協力

### < 特別協賛 >

株式会社ガイア

株式会社三菱 UFJ 銀行

公益財団法人原田積善会

トヨタ自動車株式会社

### < 協賛 >

NEC ネットエスアイ株式会社

NPO 法人日本ゲートキーパー協会

NPO 法人モバイル・コミュニケーション・ファンド

公益財団法人 SOMPO 環境財団

(旧 公益財団法人損保ジャパン日本興亜環境財団)

公益財団法人損保ジャパン日本興亜福祉財団

公益財団法人日本社会福祉弘済会

公益財団法人日本テレビ小鳩文化事業団

社会福祉法人テレビ朝日福祉文化事業団

東京都生活協同組合連合会

日本労働者協同組合(ワーカーズコープ)連合会

< 協 力 >

社会福祉法人清水基金

生活協同組合パルシステム東京

中央労働金庫

ペルノ・リカール・ジャパン株式会社

モンデリーズ・ジャパン株式会社

(50音順・敬称略)

## ❀ボランティアでご協力いただいたみなさま❀

Vフォーラム実施にあたっては、  
のべ 43 名のボランティアの方にご協力いただきました。  
本報告書では、お名前の記載は控えましたが、企画、当日の受付や会場誘導、  
分科会の運営など、さまざまな場面で支えていただきました。  
ボランティアのみなさまのおかげで、  
無事に全日程を終了することができました。  
心から感謝申し上げます。誠にありがとうございました。

## ボランティアフォーラムにご協力いただいたみなさま

Vフォーラムを開催するにあたり、多くの方にご協力いただきました。  
寄付や物品提供等、ご協力をいただいた企業・団体のみなさま、  
当日の全体や分科会の運営にご協力いただいたボランティアのみなさま、  
企画・運営に携わる実行委員のみなさま、  
多くの方に支えられ、無事開催することができました。  
多大なるご支援・ご協力をいただきましたこと、  
心より御礼申し上げます。  
誰もが参加できる市民社会を目指し、  
活動を続けていきたいと思えます。  
引き続き、ご支援、ご協力のほど、よろしくお願いいたします。

## 市民社会をつくるボランティアフォーラム TOKYO2020

### 報 告 書

---

〈発行〉 市民社会をつくるボランティアフォーラムTOKYO 2020実行委員会  
事務局 東京ボランティア・市民活動センター  
〒162-0823 東京都新宿区神楽河岸 1-1  
TEL 03-3235-1171 / FAX 03-3235-0050  
<http://www.tvac.or.jp>

〈発行月〉 2020年4月



センター管理用

ISBN978-4-909393-27-2

C2036 ¥1000E

市民社会をつくる  
ボランタリーフォーラムTOKYO2020報告書

定価： 本体 1,000 円 +税

東京ボランティア・市民活動センター



9784909393272



1922036010008

